Ⅲ　教学組織

看護学部・看護学科

【在籍者】

収容定員に対する在籍者数　(2011.4 現在)

学　年	収容定員	現　員　数	休学者数（内数）	留年者数（内数）
1　年	60	72	1	1
2　年	80	104	0	0
3　年	80	99	3	3
4　年	80	87	0	1
計	300	362 (121.0%)	4 (1.1%)	5 (1.4%)

【入学者】

学　　部　　《　》…男子内数

	学部一般	推薦/・帰国生入学		学士編入学	科目等履修生
募集要項配布期間	2011年8月～ 2012年1月	2011日7月～11月		2011年7月～9月	2012年2月～ 2012年3月
願書受付期間	2011年12月19日～ 2012年1月17日	2011年10月17日 ～10月24日		2011年9月7日 ～9月14日	2012年2月22日～ 3月7日
募　集　人　員	60 (推薦・帰国生入学15名程度を含む)	【推薦】 15	【帰国生】 若干名	20	各科目若干名
志願者数(倍率)	428 (7.1倍) 《16》	39 (2.6倍) 《1》	3 《1》	50 (2.5倍) 《5》	0
受験者数	412 (6.9倍) 《14》	38 (2.5倍) 《1》	3 《1》	48 (2.4倍) 《5》	0
合　格　者　数	1次試験　169《2》 2次試験　82《0》	15 《1》	2 《1》	20 《1》	0
補　欠　者　数	51			1《0》	
入学者数	58《0》	15《1》	2《1》	20《1》	

【卒業生】

	学部一般	編入生
卒業生数	70*	17
入学時人数	70	21
上級から加わる	1	0
下級へ下がる	1	2
退学	0	2

＊９月卒業生を含む

【平均修得単位数】

平均修得単位数（学士編入生を除く）

		卒業所要単位数	平均取得単位数	最高取得単位数	最低取得単位数
教養科目	教養科目		22	41	17
	外国語科目	10	10	14	10
	小計	28	33	51	28
基礎科目		32	32	32	32
専門科目		69	71	78	69
総計		128	136	160	130

【国家試験結果】

国家試験結果

	受験者（名）	合格者（名）	合格率（%）
保健師	87	81	93.1
看護師	87	87	100.0

【看護学部科目等履修生】

科目等履修生開講科目および履修者数

	授業科目	単位数	履修者数	単位修得者数	単位未履修者数
前期	心理学	2	1	1	
	生涯発達論Ⅱ	2			
	看護提供システムⅠ	2			
	看護技術論	1			
	慢性期看護論Ⅱ	2			
	学校保健	2			
	養護概説	2	1	1	
	看護研究Ⅰ	2	1	1	
	看護ゼミナール（がん看護）	1			
	看護ゼミナール（遺伝看護）	1	1	1	
	看護ゼミナール（老年看護学実践ゼミ）	1	1	1	
後期	教育方法の研究	2			
	教育制度論	2	1	1	
	カウンセリング概論	2	2	2	
	環境論Ⅱ	2			
	看護政策論	2	1	1	
	看護研究Ⅱ	3	1	1	
			計	10（100%）	0

【実習施設】

実習施設一覧表

	授業科目	単位数	施設名		授業科目	単位数	施設名
1	看護援助論Ⅳ	1	聖路加国際病院	6	臨地実習Ｂ	2	東府中病院
2	臨地実習Ａ	2	聖路加国際病院	7	臨地実習Ｃ	2	聖路加国際病院
3	臨地実習Ａ	2	済生会横浜市東部病院	8	臨地実習Ｄ	2	聖路加国際病院
4	臨地実習Ａ	2	神奈川県立こども医療センター	9	臨地実習Ｅ	2	永生会永生病院
5	臨地実習Ｂ	2	聖路加国際病院	10	臨地実習Ｅ	2	救世軍ブース記念病院

	授業科目	単位数	施設名		授業科目	単位数	施設名
11	臨地実習Ｅ	2	ブース記念老人保健施設グレイス	43	臨地実習Ｇ	3	あすか山訪問看護ステーション
12	臨地実習Ｅ	2	介護老人保健施設リハポート明石	44	臨地実習Ｇ	3	訪問看護ステーションけせら
13	臨地実習Ｅ	2	永生会老人保健施設イマジン	45	臨地実習Ｇ	3	訪問看護ステーションみけ
14	臨地実習Ｆ	2	東京武蔵野病院	46	臨地実習Ｇ	3	訪問看護ステーションけやき
15	臨地実習Ｇ	3	杉並区荻窪保健センター	47	臨地実習Ｇ	3	訪問看護ステーションさぎそう
16	臨地実習Ｇ	3	杉並区高円寺保健センター	48	臨地実習Ｇ	3	城北訪問看護ステーション
17	臨地実習Ｇ	3	杉並区上井草保健センター	49	臨地実習Ｇ	3	東電さわやか訪問看護ステーション中野
18	臨地実習Ｇ	3	杉並区高井戸保健センター	50	臨地実習Ｇ	3	訪問看護ステーション芦花
19	臨地実習Ｇ	3	杉並区和泉保健センター	51	臨地実習Ｇ	3	岩本町訪問看護ステーション
20	臨地実習Ｇ	3	豊島区池袋保健所	52	臨地実習Ｇ	3	新みさと訪問看護ステーション
21	臨地実習Ｇ	3	豊島区長崎保健所	53	臨地実習Ｇ	3	河北杉並訪問看護ステーション
22	臨地実習Ｇ	3	千代田区千代田保健所	54	臨地実習Ｇ	3	すみれ訪問看護ステーション
23	臨地実習Ｇ	3	中央区日本橋保健センター	55	臨地実習Ｇ	3	桜台訪問看護ステーション
24	臨地実習Ｇ	3	中央区中央区保健所	56	臨地実習Ｇ	3	訪問看護ステーション北沢
25	臨地実習Ｇ	3	中央区月島保健センター	57	総合実習	2	聖路加国際病院
26	臨地実習Ｇ	3	中野区中部すこやか保健福祉センター	58	総合実習	2	訪問看護ステーションパリアン
27	臨地実習Ｇ	3	中野区北部健康福祉センター	59	総合実習	2	東京武蔵野病院
28	臨地実習Ｇ	3	中野区南部保健福祉センター	60	総合実習	2	聖路加国際病院訪問看護ステーション
29	臨地実習Ｇ	3	中野区鷺宮保健福祉センター	61	総合実習	2	共同作業所ひやしんす城北
30	臨地実習Ｇ	3	おもて参道訪問看護ステーション	62	総合実習	2	多摩たんぽぽ訪問看護ステーション
31	臨地実習Ｇ	3	浅草医師会立訪問看護ステーション	63	総合実習	2	永生会永生病院
32	臨地実習Ｇ	3	医師会立中央区訪問看護ステーション	64	総合実習	2	川崎市立井田病院
33	臨地実習Ｇ	3	医師会立品川区訪問看護ステーション	65	総合実習	2	東芝ヒューマンアセットサービス㈱保健支援事業部
34	臨地実習Ｇ	3	セコムとしま訪問看護ステーション	66	総合実習	2	小鹿野町保健福祉センター
35	臨地実習Ｇ	3	セコム世田谷訪問看護ステーション	67	総合実習	2	ＮＴＴ東日本首都圏健康管理センター
36	臨地実習Ｇ	3	セコム市川訪問看護ステーション	68	総合実習	2	訪問看護ステーションあかし
37	臨地実習Ｇ	3	セコム吉祥寺訪問看護ステーション	69	総合実習	2	助産婦石村
38	臨地実習Ｇ	3	練馬区医師会立訪問看護ステーション	70	総合実習	2	かもめ助産院
39	臨地実習Ｇ	3	自由が丘訪問看護ステーション	71	総合実習	2	ウパウパハウス岡本助産院
40	臨地実習Ｇ	3	白河訪問看護ステーション	72	総合実習	2	結核予防会結核研究所
41	臨地実習Ｇ	3	板橋ロイヤル訪問看護ステーション	73	総合実習	2	東邦大学医療センター大森病院
42	臨地実習Ｇ	3	白十字訪問看護ステーション				

	授業科目	単位数	施設名		授業科目	単位数	施設名
1	養護実習Ⅰ・Ⅱ	5	目黒区立碑小学校	6	養護実習Ⅰ・Ⅱ	5	岩舟町立静和小学校
2	養護実習Ⅰ・Ⅱ	5	豊島岡女子学園 中・高等学校	7	養護実習Ⅰ・Ⅱ	5	御代田町立御代田南小学校
3	養護実習Ⅰ・Ⅱ	5	熊谷市立江南中学校	8	養護実習Ⅰ・Ⅱ	5	日出学園中学高等学校
4	養護実習Ⅰ・Ⅱ	5	武蔵高等学校中学校	9	養護実習Ⅰ・Ⅱ	5	松戸市立柿ノ木台小学校
5	養護実習Ⅰ・Ⅱ	5	所沢市立中央小学校	10	養護実習Ⅰ・Ⅱ	5	お茶の水女子大学付属中学校

Class of 2012（2012 年 3 月卒業）　総合看護・看護研究Ⅱタイトル一覧

学籍番号	氏　　名	領　域	指導教員	タ イ ト ル
08B01	青山花織子	学校保健	留目　宏美	家庭における性教育の促進と充実化のためのサポートの検討 －大学生の子どもを持つ母親へのインタビューを通して－
08B02・08B40	浅川恵津子・滝口　知世	学校保健	留目　宏美	普通学級に在籍する発達障害をもつ児童生徒に対する教育指導・教育支援の在り方について －教諭（学級担任）と養護教諭の役割から－
08B03	井田　早希	母性	有森　直子	Ｂ区ダウン症候群親の会と看護学生の協働による、療育プログラムの作成と評価
08B04	市川　紗綾	精神	木戸　芳史	地震災害が子どもに与える心理的影響とその要因に関する文献検討
08B05	市村紗央里	老年	梶井　文子	身体的接触のあるアロマセラピーが認知症高齢者へのスキンシップ効果につながった文献における対象者の変化及び実施方法の特徴
08B06	伊藤　元子	精神	木戸　芳史	精神疾患をもつ人々に対する偏見の要因に関する文献検討
08B07	岩瀬　和子	精神	大橋　明子	希死念慮のあるうつ病患者への看護師の効果的な関わり
08B08	内谷すみれ	成人慢性期	大坂和可子	子どもをもつ若年性乳がん患者が子どもに対して感じている思いとそれに対する看護支援
08B09	大内真奈実	基礎	大久保暢子	看護師における腹臥位の手技に関する現状とその有用性 ～呼吸機能改善に焦点をあてて～
08B10	大久保美歩	学校保健	岩辺　京子	私立中高一貫校における心のケアの現状と今後の展望
08B11	梶　亜紀子	成人慢性期	大坂和可子	２型糖尿病患者が抱く食事療法・運動療法に対する陰性感情に関して闘病記を用いた文献的考察
08B46	梶原みのり	成人慢性期	飯岡由紀子	看護における「共感」の文献的考察
08B13	加藤　聡姫	母性	五十嵐ゆかり	出産に立ち会った夫の体験 －バースレビューを用いて－
08B14	金子　　令	精神	角田　　秋	統合失調症の子を持つ親が子の初回入院時に抱く思いとそれに対する看護支援
08B15	株本　杏奈	成人急性期	林　　直子	救急看護領域における家族ニーズに応じたケアの検討と課題
08B16	河崎　舞子	基礎	菱沼　典子	経管栄養を施行中の患者における「食事」として捉えた看護援助の検討
08B17	岸本　梨沙	老年	梶井　文子	入院中の高齢患者への整髪ケアに対する看護師・介護士の思い
08B18	木下　勇輝	菊田	菊田　文夫	宿泊型自然体験活動に参加した子どもの成長に関する研究 －聖路加看護大学が主宰するキャンプを通して－
08B19	栗原優里奈	老年	山本　由子	集団回想法における認知症高齢者の変化についての文献検討 －認知症高齢者間またはスタッフとの相互コミュニケーションに着目して－
08B20	國米　洋美	地域	小野若菜子	児童虐待の支援における保健師の役割・困難・課題

学籍番号	氏　　名	領　域	指導教員	タ イ ト ル
08B21	小林　　歩	地域	小林　真朝	禁煙の苦痛と医療および産業における禁煙指導の比較から考える産業看護職の禁煙へのアプローチ
08B22	小林　俊介	老年	梶井　文子	高齢患者の術後せん妄に対する看護の視点 －整形外科病棟の看護師へのインタビューを元に－
08B23	小林みずき	小児	小野　智美	入院中の学童期の子どもの遊びと看護師・保育士・ＣＬＳの遊びへの援助と協働
08B24	斉藤　美樹	成人 慢性期	大坂和可子	病棟看護師が行う退院に向けた看護への課題 ～退院後の患者を看護する訪問看護師へのインタビューから
08B25	齋藤　律子	基礎	佐居　由美	日 本におけるスタンダードプリコーションの導入・普及の経緯と現在の課 題
08B26	榊原あゆみ	母性	有森　直子	保健医療分野における意思決定支援の効果に関する文献検討と看護師の役割の考察
08B27	佐藤かほり	母性	有森　直子	出生前診断の事前遺伝カウンセリングに関する文献検討
08B28	佐藤　　伶奈	精神	大橋　明子	BPSDをもつ認知症患者を支える家族の思いに関する研究の現状と課題
08B29	柴田　　萌	学校 保健	岩辺　京子	災害時に養護教諭ができること・求められること －震災後、養護教諭に求められる子どもの心身のケア－
08B30	澁木　睦実	成人 慢性期	飯岡由紀子	若年性乳がん患者の抱える苦悩に対する看護師が行うケアの実際
08B32	鈴木　智美	老年	山本　由子	運動性失語症高齢者のコミュニケーション機能再獲得に向けた看護の関わりについての文献検討
08B33	上田　佳輪	成人 慢性期	飯岡由紀子	がん性疼痛管理に携わる看護師に適する教育体制の在り方
08B34	瀬尾　　円	成人 急性期	池口　佳子	がんのターミナルステージにある患者と家族が在宅ホスピスケアへ移行する際の退院支援において看護師が果たすべき役割
08B35	関　　晴菜	地域	大森　純子	保健師が持つ災害への備えに関する意識の実態 －高齢者に対する保健活動に焦点を当てて－
08B36	関谷　明希	Huffman	Jeffrey Huffman	How parents of children with developmental disabilities accept children's disabilities-differences between Japan and the U.S. 発達障害をもつこどもの親の障害受容過程－日本とアメリカの違い
08B37	添田　　桜	廣瀬	廣瀬　清人	看護学生におけるＹＧパーソナリティと特性的コーピングの対応について
08B38・08B70	高野麻衣子・渡辺裕里絵	管理	井部　俊子	応急手当講習会の現状と学生が応急手当講習会に参加する動機付けの探求
08B39	高橋　未来	成人 慢性期	飯岡由紀子	更年期障害の女性に夫が与える影響
08B41	田中　菜央	母性	蛭田　明子	ザンビア共和国における妊産婦支援プロジェクトを通して途上国支援提供に必要な姿勢のあり方を考える
08B42	田中　真央	精神	角田　　秋	精神科病棟に入院する患者の家族に対する看護支援の方策
08B43	田原　晴奈	精神	大橋　明子	看護学生が持つやせ願望とその行動への結びつき
08B44	長田　尚子	管理	井部　俊子	Nurse Practitioner　の成立と活動に関する文献検討
08B45	新山由香里	基礎	蜂ヶ崎令子	臨床の看護師によるポジショニング（その実践のあり方と看護職の意識）
08B46	西田　　絢	母性	五十嵐ゆかり	経産婦の生活の再構築の過程 －産褥１週間から産褥１ヶ月への変化を通じて－
08B47	沼田うらら	母性	片岡弥恵子	看護学生のブレスト・アウェアネスに対する意識と行動
08B48	野上　夏実	基礎	伊東美奈子	臨地実習中に看護学生が抱える学習上の不安や困難感を軽減するための教員による援助に関する研究

学籍番号	氏　　名	領　域	指導教員	タ イ ト ル
08B49	野田　湖美	精神	木戸　芳史	震災直後から看護活動に従事していた被災地勤務の看護師のストレス反応とその要因に関する文献検討
08B50	橋爪　　由樹	成人慢性期	川端　　愛	がん患者の家族が抱える困難に関する文献的考察
08B51	林　　景子	地域	大森　純子	働く 30 代女性の月経への思い　～語る会の試行を通して～
08B52	林　　蓉子	教育	松谷美和子	３年次の臨地実習における看護学生と臨床指導者役割を担う病棟看護師との心理的相互関係－看護学生の実習満足感の視点から－
08B53	平川　瑠華	教育	松谷美和子	看護学生が臨地実習のために行った事前学習・学習環境準備・精神的準備とその効果：A看護大学４年次生の質問紙調査
08B54	平島　萌子	教育	堀　　成美	日本におけるトラベルワクチンの現状と課題、トラベルワクチン接種を啓発する方法の検討
08B58	前島　彩乃	教育	堀　　成美	千葉県の自治体による予防接種についての情報提供への取り組み現状と課題
08B55	平松　紫乃	中山	中山　和弘	乳がん患者の闘病ブログ開始動機におけるコーピングへの期待と他者のモデリング
08B56	船田　恵里	学校保健	岩辺　京子	小学校における性教育の実態と今後の性教育や養護教諭の課題 －養護教諭に対するアンケート調査を通して－
08B57	古畑　菜緒	地域	大森　純子	子どもの生活リズムを整えていくことに関する母親の経験 ～第１子の乳児期における３事例の分析から～
08B59	枡谷　香奈	母性	實崎　美奈	不妊症看護認定看護師が行なっている初診時看護の現状 －フォーカスグループインタビュー法を用いて－
08B60	松石雄二朗	基礎	伊東美奈子	ICUにおけるせん妄予防ケアの有効性についての文献検討
08B61	松木　智美	老年	亀井　智子	ベテラン訪問看護師による在宅認知症高齢者の家族への精神的負担感に関するケア
08B62	三井　織江	学校保健	岩辺　京子	災害時に養護教諭ができること・求められること －東日本大震災直後の養護教諭の役割から－
08B63	宗方　由紀	成人急性期	林　　直子	クリティカルケア領域において代理意思決定を求められる家族に対する看護師が行う情報提供の現状と課題
08B64	森田　誠子	伊藤	伊藤　和弘	生存権保障の現状と保健師の社会保障実務における今後の課題 －生存権に関する判例の分析から－
08B65	安田みなみ	基礎	大久保暢子	看護系大学における解剖生理学（形態機能学）教育の歴史的変化と今後への示唆
08B66	大和　　茜	基礎	蜂ヶ崎令子	入浴の効果についての検討
08B67	吉野　　彩加	精神	萱間　真美	学童期発症の神経性食欲不振症に対する看護介入の分析 －日本での事例研究の文献検討を通して－
08B68	四方田美里	成人急性期	林　　直子	集中治療領域で死を迎える患者と家族へのケアに対する看護師の認識と看護実践に関する文献的考察
08B69	若松　聡美	母性	蛭田　明子	妊婦の冷えに対する助産師のアプローチについて
08B76	赤羽　麻理	母性	有森　直子	T区で生活するダウン症候群児とその家族が必要とする支援について
09B77	揚村　雄介	精神	角田　　秋	精神科訪問看護における家族支援方法の検討 －在宅統合失調症患者の家族の思いに焦点を当てて－
09B78	荒木　理紗	地域	小野若菜子	在宅重症心身障がい児に対する看護師とヘルパーの日常生活援助に関する認識
09B79	泉　美智子	鶴若	鶴若　麻理	成年後見制度における後見人への医療同意権付与に関する検討
09B80	伊藤　英子	鶴若	鶴若　麻理	大学における死生観に関する教育の現状と課題

学籍番号	氏　名	領　域	指導教員	タイトル
09B81	稲井　晴子	老年	亀井　智子	パーキンソン病の歩行障害症状に変化をもたらすリズム刺激および選曲等の嗜好反映の方法－音楽療法実践についての文献研究－
09B83	岩本　　萌	中山	中山　和弘	女性の生活や羞恥心に配慮した乳がん検診の必要性とその在り方 －Q&Aサイト上における乳がん検診に関連した質問の分析から－
09B84	奥村仁美子	地域	小野若菜子	人工肛門保有者の日常生活の課題～文献検討とフィールドワークから～
09B85	岩田芙由子	成人慢性期	飯岡由紀子	がん性疼痛コントロールにおけるがん性疼痛看護認定看護師のアセスメントの実際
09B86	糟谷　祥子	基礎	佐居　由美	患者の安楽や状態の改善につながったと思う看護技術の実践が看護師にもたらすもの
09B87		中山	中山　和弘	Q&Aサイトの投稿内容からみた認知症介護によっておこる家族問題における理解不足と伝統的役割
09B89	能登　太郎	地域	小林　真朝	若年非正規労働者の健康問題について －健康問題を引き起こす要因と今後の課題－
09B90	畠中　禎子	教育	堀　　成美	看護学生のB型肝炎ワクチン接種状況とワクチン接種行動に影響を与える要因
09B92	本城加奈子	成人慢性期	飯岡由紀子	再発・転移がん患者の精神的苦痛に対する効果的な心理的介入の文献的考 察
09B94	山口　恭子	成人急性期	林　　直子	患者が望む不安軽減のための情報提供の工夫－術前訪問において－
09B95	山崎　博子	中山	中山　和弘	保健師活動において、ソーシャルマーケティング理論が暗黙知と形式知をつなぐ役割－がん検診受診率向上事業を通してみた仕組みづくりの提案
09B96	遊馬　早季	教育	堀　　成美	先進国における看護職に対する予防接種教育の現状と日本の課題
科目等履修生	金　　明華	伊藤	伊藤　和弘	看護師国家試験からみる遺伝看護においての基礎看護教育の現状と課題

【学部選択科目履修状況】

(新カリキュラム)

授業科目			学年	人数
基礎科目	人間と文化	キリスト教倫理	1年	4
		音楽	1年	16
		美術	1年	23
		文学	1年	13
		哲学	1年	19
		倫理学	1年	11
	人間と社会	歴史学	1年	7
		法学（日本国憲法）	1年	65
		教育原理	1年	39
		教育方法の研究	1年	23
		社会学	1年	43
		心理学	1年	30
	人間と言語	選択英語Ⅰ	1年	10
		海外語学演習	1年	7
		ドイツ語Ⅰ	1年	17
		中国語	1年	16

授業科目			学年	人数
基礎科目	人間と情報	基礎統計学		14
	人間と自然環境	生物学	1年	10
		物理学	1年	19
		化学	1年	5
	体育	体育Ⅰ	1年	67
		体育Ⅱ	1年	60
	総合科目	総合科目Ⅱ（健康科学）	1年	26
		総合科目Ⅲ（ボランティア活動学習）	1年	18
		総合科目Ⅳ（自校学習）	1年	24
		総合科目Ⅴ（国際交流演習）	1年	
専門科目	看護実践	国際看護学	1年	25

（旧カリキュラム）

授業科目			学年	人数
基礎科目	人間と文化	音楽	2年	3
		美術	2年	1
		文学	2年	8
		倫理学	2・3年	10
		宗教学	2・3年	11
	人間と社会	歴史学	2年	0
		法学（日本国憲法）	2・4年	52
		教育制度論	2年	32
		カウンセリング概論	2年	41
		教職概論	2年	30
		教育課程論	4年	8
		道徳及び特別活動論	4年	8
		生徒指導論	4年	9
		女性学	2年	16
	人間と言語	国語表現法	2年	6
		英語Ⅲ－B	2年	18
		文献講読A	2年	16
		文献講読B	3年	18
		英語表現法Ⅲ－S	2年	4
		英語表現法Ⅲ－W	3年	6
		異文化コミュニケーション	3年	44
		ドイツ語Ⅱ	2年	4
		中国語	2年	0
	人間と情報	情報科学	2年	開講せず
		統計学	2年	13
		統計学演習	4年	3
	体育	体育Ⅰ	1年	8
		体育Ⅱ	2～4年	6
	総合科目	総合科目Ⅱ（健康科学）	2年	0
		総合科目Ⅲ（生活科学論）	2年	0
		総合科目Ⅳ（国際交流演習）	2～4年	8

授業科目			学年	人数
専門科目	看護の基本	看護提供システムⅡ	4年	17
		看護技術論	4年	0
	人間と環境の相互作用の保持・強化	生涯発達看護論Ⅲ	4年	開講せず
		家族発達看護論Ⅱ	4年	6
		地域看護論Ⅲ	4年	12
		学校保健	3年	14
		養護概説	4年	11
	人間と環境の相互作用の修正	慢性期看護論Ⅲ	4年	6
		リハビリテーション看護論Ⅱ	4年	5
	人間と環境の相互作用の回復・保護	急性期看護論Ⅲ	4年	32
	看護学統合	看護研究Ⅱ	4年	85
		総合看護	4年	2
		看護ゼミナール（生涯を持つ子どもと家族の看護）	4年	6
		看護ゼミナール（遺伝看護）	4年	6
		看護ゼミナール（看護教育）	4年	3
		看護ゼミナール（国際看護）	4年	5
		看護ゼミナール（生活行動が障害された患者とその家族の看護）	4年	12
		看護ゼミナール（老年看護学実践ゼミ）	4年	6
		看護ゼミナール（学校における緊急処置）	4年	9
		看護ゼミナール（自校史演習）	4年	0
		看護ゼミナール（感染看護）	4年	8
		看護ゼミナール（がん看護）	4年	8
		養護実習Ⅰ	4年	10
		養護実習Ⅱ	4年	10

【立教大学全学共通カリキュラム】履修状況

授業科目	履修者数
持続可能な社会と平和	2
規制改革を考える	1
表象文化	2
心の健康	1
パーソナリティの心理	1
対人関係の心理	1
対人関係の自己理解	1
生命の科学	3
生物の多様性	1

【立教大学科目履修状況】

	前期	後期
開講科目数	113	113
履修科目数	9	0
履修者数	9	0
単位習得率	92.30%	

入試委員会

1．構成員

［委員長］　及川郁子

［委　員］　井部俊子、菱沼典子、麻原きよみ、田代順子、柳井晴夫、山口喜義（事務局）

［書　記］　教務部　櫛田智恵美

2．役割・職務

1）聖路加看護大学入試委員会規程により看護学部入学者選抜の実施に関する事項を審議し公正な方法で実施運営を図る。

2）審議事項は、入学者受入方針（アドミッション・ポリシー）、入学者選抜方法の検討と選抜試験の実施、入学選抜に関する情報提供および情報開示、各委員（出題、校正、面接、採点）の人選、入学者選抜の統計、その他入学者選抜に関すること。重要事項は教授会の議を経て決定する。

3．活動内容

1）委員会は常設で定例会は原則毎月１回開催した。

2）入試名称の変更

【2011】推薦（帰国生を含む）→【2012】推薦・帰国生

【2011】学士編入学（第 2 年次）→【2012】第２年次学士編入学（社会人入試）

3）平成 23 年度全国大学入学者選抜研究連絡協議会大会「特別緊急セッション～大学入学者選抜の危機対応～」への出席（及川入試委員長）

4）入学試験時における災害対応マニュアルの作成

5）外国人留学生が学士編入学試験を受験する際、日本語能力試験 1 級取得を日本留学試験結果に読み替えることとした。

6）平成21年告示高等学校学習指導要領に対応した平成28年度一般入試（理科は平成27年度から）の出題教科・科目等について検討し中間報告をまとめた。

7）情報開示の実施（2011一般および2012学士編入学）

8）入試ミス防止のため他大学と入試問題の点検について意見交換を行った。また第３者による入試問題の事前・事後チェックを導入した。(2012編入「生物」事後、2012一般「理科（生物Ⅰ、化学Ⅰ）」事前)

9）健康上の理由によって特別配慮が必要な受験生の出願書類について検討を行い、配慮事項申請書の書式および提出書類について定めた。

10）大学入試センター導入の検討にあたり2011年度一般入学試験入学者（大学入学センター試験も受験した学生）にヒアリングを実施した。結果、本学独自の入試を実施する意味が判明したとの結論に至った。

11）2013年度学部全ての入学試験において携帯電話 Web 画面による合格発表を実施することとした。

4．課題

1）新学習指導要領実施に伴う一般入学試験の出題教科・科目の決定

2）入試業務専用室の確保

3）更なる入試ミスの防止に努める

4）一般入学試験（１次）会場割り当てと未使用会場担当教職員の配置

5）マークシート方式解答用紙の調査および検討

6）指定校推薦入学についての検討

カリキュラム運用委員会

1．構成員

［委員長］　麻原きよみ

［委　員］　伊藤和弘、菱田治子、菊田文夫、廣瀬清人、鶴若麻理、中山和弘、菱沼典子、田代順子、松谷美和子、及川郁子、森　明子、林　直子、飯岡由紀子、亀井智子、萱間真美、井部俊子、岩辺京子

［書　記］　教務部　高橋昌子

2．役割・職務（カリキュラム運用委員会規程）

本学の教育理念のもと、現行の看護学部教育課程の運用および編成に係る事項について所用の審議を行い、必要あれば教授会に上程する。具体的には、以下のことを審議する。

1）教育課程の編成に関すること
2）授業科目および実習の実施に関すること
3）時間割の編成に関すること
4）前各号に係る評価に関すること
5）単位の認定に関すること
6）非常勤講師、臨時助教の採用に関すること
7）学生の履修状況に関すること
8）その他教育課程に関すること

3．活動内容

11回の委員会を開催し、例年の上記審議事項の他に、以下について審議を行った。

1）保健師国家試験受験資格に関する科目として、「体育Ⅰ・Ⅱ」２単位、「国際看護学」１単位を必修とすることを決定した。
2）新カリキュラムが開始されたため、本年度開講される科目紹介をFSミーティングで行うことを決めた。
3）科目名の英訳について検討を行った。
4）臨地実習担当者会議において検討された実習の災害時における学生行動マニュアルを検討し、実際に今年度の臨地実習より運用していくことを決定した。
5）総合実習（国際看護）のあり方について、検討を行った。
6）2011年度臨地実習G（地域看護）の実習展開方法について検討した。
7）感染症による出席停止の扱いについて検討し、「感染症治癒報告書」を学生が提出することを決定した。便覧には感染性の強い疾患について、具体的な病名を明記すること、感染症治癒報告書を提出した学生は担当教員に相談することを記載することを決定した。
8）臨地実習における暴力・ハラスメントについてのオリエンテーションの報告があり、その内容の検討を行った。
9）地域・在宅看護学の見学実習について、他の授業科目を入れない２日間で実施することを決定した。

4．課題

1）保健師国家試験受験資格選択者の具体的な選抜方法については、次年度２月までには検討する必要がある。
2）科目等履修生の養護実習１単位の開講について検討課題であったが、未だ検討されていない。引き続き検討が必要である。
3）本年度も開講できない科目があったが、次年度は予定されるすべての科目が開講される予定である。
4）保健師助産師看護師学校養成所指定規則の改正に伴う変更承認申請は、無事終了した。今後は、新カリキュラムを本格的に展開させていくことになるため、円滑な運用が課題である。

実習単位認定者会議

1．構成員

五十嵐ゆかり、宇都宮明美、大坂和可子、大橋明子、小野智美、小林真朝、佐居由美、角田　秋、長松康子、山本由子

2．役割・職務

各実習レベルの実習単位認定者による学生の指導を円滑に進めるための連絡会議

3．活動内容（上記２に沿って記述）

定例会議を３回開催し、学生の指導を円滑に進めるための情報共有、実習指導体制の整備について検討を行った。

1）実習の積み重ね（各実習レベル目標）の活用について

臨地実習レベルⅡの達成度自己記入用紙をレベルⅢの実習前に確認を行った。レベルⅡでの個々の課題を明確にした上でレベルⅢ実習を行うことによっ

て、レベルⅢの実習目標到達に活用した。

2）実習でのハラスメント防止と対応について

担当者を中心に各実習担当領域にて内容を検討し、看護援助論Ⅳ・臨地実習の実習オリエンテーションにて、学生を対象に説明を行った。

3）個人情報の取り扱いについて

近年の課題としてツイッターなどのSNSへの書き込みが挙げられ、実習オリエンテーションにて注意喚起を行った。また、電子媒体による実習記録は、匿名化しているとはいえ、紙ベースの記録物より、情報流出の危険性は高く、より注意して取り扱う必要がある。

4）安全に実習を進めるための方策について

インシデント・ヒヤリハット事例の共有を行い、対応と予防策について意見交換を行った。

5）その他

健康管理室との連携をはかるため、可能な範囲で木暮聖子保健師に会議出席を依頼した。

4．課題（今後の検討課題）

1）新カリキュラムにおける実習レベル目標の有効な活用方法について

2）実習オリエンテーションの内容について（個人情報取り扱い、ハラスメント対応など）

3）電子媒体による実習記録の取り扱いについて

臨地実習Ⅱ担当者会議

1．構成員

臨地実習Ⅱ担当教員全員

2．役割・職務

臨地実習Ⅱの実習運営のための検討および運営

3．活動内容

４月と６月に構成員で会議を開催し、臨地実習に向けた準備と指導体制について検討した。

1）実習オリエンテーションの目的と内容の検討

臨地実習に向けて２回（７、９月）のオリエンテーション（以降オリとする）を行っているが、内容の重複が課題となっていたため、各オリの主な目的と内容を整理した。重複していた教務からのオリは７月のみとした。また、東日本大震災や今までのインシデントを踏まえ新たなオリ①～③（下記参照）を加えた。①～③は領域の特性などを考慮してワーキンググループを編成してオリ内容を吟味することとした。①と②は新たな取り組みのため、カリキュラム運用委員会にてオリ内容を討議の上、一部内容の修正を行い、学生に提示した。

７月オリは、教務と健康管理からのオリに加えて、各実習領域５分程度の概要説明と、その他の留意事項の説明とした。９月オリは、全体オリ、Smile for、感染管理、ハラスメントへの対応、健康管理、災害時の対応に加えて、各実習領域10～20分の説明を行うこととした。

①ハラスメントへの対応に関するオリ：暴力・ハラスメントの定義、それらが生じる要因、予防・回避する方法、即座の対処について配布資料を用いて説明した。配布資料はカリキュラム運用委員会において検討し、誤解を招きやすい表現を修正し、修正箇所と説明を加えた追加資料を再度学生に配布した。

②災害時の対応に関するオリ：実習中は実習施設での実習中であったり実習施設や訪問先への移動中であるなど学生の状況が多岐にわたるため、「災害時の学生行動マニュアル実習版」としてフローチャートを作成した。災害の定義、緊急連絡先、安否確認システムへの状況報告のタイミングなどをフローチャートに含めた。オリではフローチャートの説明を行った。

③電子カルテシステムSmile forのオリ：電子カルテの活用方法と情報管理のあり方を含めてオリを行った。

2）技術チェック

昨今の実習状況に鑑み、技術内容を再検討した。静脈採血は実習で滅多に実施されないため、比較的施行機会が多い血糖値測定採血を行い、全身清拭とリネン交換は時間内で終了するように短縮化した。

3）聖路加国際病院のJCI（Joint Commission International）評価に伴う対応

JCI評価に向け、感染マニュアルが大幅に変更された。また病院評価日と実習が重なるため学生や教員が評価対象となる可能性などが考慮された。そこで、当該臨地実習のオリで、聖路加国際病院教育研修部担当者よりJCIに関する事項、病院理念、感染管理に関してオリを行った。

4．課題

1）新カリキュラム時のオリの内容と進め方を検討する必要がある。

2）今後の JCI に関連したオリは、聖路加国際病院の要請を含め検討する必要がある。

実習室委員会

1．構成員

［委員長］　平林優子

［委　員］　伊東美奈子、浅井宏美、川端　愛、島田裕司

2．役割・職務

聖路加看護大学の学生が必要な看護技術を修得するために実習室の環境を整える。

1）地下および6階実習室と教材が、学生の学習環境として整うように管理・運営する。

2）実習室自己学習支援員を配置し、学生の自己学習支援を行えるように依頼・調整する。

3．活動内容（表１・２参照）

4．課題

1）新カリキュラムに移行し、各科目の実習室利用状況、自己学習時期等の予測が新たに必要。

2）今年度は大学院生が継続で確保できたものの、１名は短期間で交代した。週２回の支援員の継続確保は課題のままである。今年度支援員の活用をアピールし利用者は増えた。課題１）と関連して勤務日などの調整が今後必要となる

表１　実習室委員会活動内容

活動項目	活動内容
実習室支援員の確保・支援業務依頼・日程調整・勤務管理・学内周知	原則週２回（火・木）の13～19時に各１名の支援員が活動ができるように調整した。掲示とメールで学内に周知した。
地下、6 階の実習室インベントリー	３月12日（金）10:00～17:00、教員（10:00-12:00）、学生アルバイト（10:00-15:00）、実習室委員（９:30-17:00）計41名で実施。不要物品の整理、修理依頼・アーカイブへの移行含む
医療機器・教材の点検	①臨床工学士による医療機器の点検を依頼（７月、３月）、②蘇生・シミュレーター人形の点検を業者に依頼（２月）、③機器の充電、通電・作動点検を毎月確認（自己学習支援員による）
物品の修理・破損物の処理	年間を通じて実習室物品・教材の修理や破損物処理の窓口となる。
物品の貸し出し・実習室使用の調整	学内教員の教材・物品貸し出し表により貸し出しを把握。返却が遅い場合は連絡等の管理に役立てた。学生への貸出票（教務課保管）はよる管理。文化祭や病院の研修等の貸出しの相談・調整・準備
業者による清掃依頼・インベントリー時の棚・物品の清掃	業者への清掃依頼（８月、２月）：倉庫内ワックスがけ（２月）、ベッド、床頭台、棚扉や枠等の清掃。インベントリー時（３月）は全棚内・教材物品類の清掃。
全ベッドのリネンの洗濯・交換	８月、３月（２回）実施
実習室必要物品の購入・予算計上	各領域からの要望を聴取し、必要性の検討を行って予算計上。今年度実習室購入備品は、沐浴人形・テルフュージョンポンプ、Ⅳスタンド、演習用パジャマ等である。
実習室環境整備	①スクリーンの布の洗濯、②ベッド整備、③日々の環境整備、⑤設備修繕上の連絡調整
実習室使用に関するアナウンス	①自己学習室マップの掲示とアナウンス、②実習室使用上のマナーの呼びかけ（掲示等）、③実習室に関連する情報のアナウンス
地震時の物品調達・片付け・整備	震災時の片づけを4月まで実施。一部の実習室物品を支援活動用に発送準備した。震災時に使用が予測される物品のマップや懐中電灯を倉庫のドアに貼った。分かりにくい物品は倉庫内でも掲示した。

表２　実習室自己学習支援員による自己学習支援件数　（延べ人数）

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合　計
1年生	0	0	0	0	0	8	45	25	138	34	11	0	261
2年生	0	27	217	33	2	96	9	0	0	0	2	0	386
3年生	0	0	0	0	0	12	13	9	34	2	3	0	73
4年生	0	0	8	0	0	0	0	0	0	0	0	0	8
大学院	0	0	0	0	0	1	0	0	7	3	0	0	11
計	0	27	225	33	2	117	67	34	179	39	16	0	739

体育デー委員会

１．構成員

［委員長］　佐藤さやか（３年生）

［副委員長］　細川舞子（３年生）

［委　員］　４年生：岩瀬和子、榊原あゆみ、添田　桜、学士13：揚村雄介

２年生：今井莉絵、澤田彩乃

学士14：安達麻衣、岩坂典子、谷口絵里菜

１年生：岩本千波、鈴木菜香

学士15：板橋みずほ、遠藤まりえ、冨澤真希

［顧　問］　大濱あつ子（特別顧問）、大橋久美子、木戸芳史、進藤　務

２．役割・職務

体育デーは、１）他の学年の人たちや先生方との親睦を深める、２）身体を動かし、気持ちの良い汗を流す、３）楽しむ、という目的で行われる（2011 年度体育デーのしおりより）。本委員会は学生委員が主体となって体育デーの企画･運営を行い、教職員顧問は学生委員のサポートを中心に行う。

３．活動内容

４月に新入生委員の勧誘を行い、学生委員内で前年度の引き継ぎが行われた。体育デー委員会は体育デーの企画・準備のため週１－２回程度、昼休みに開催された。主な準備内容は、役割分担・種目決め・ルール決め・必要物品の準備に加え、各チームの参加者出場種目の決定・体育デーのしおりの作成と参加者への配布（学生全員、参加教職員）などであった。教職員は委員会に参加し、学生の自主的な活動に向けたアドバイスや支援、教職員の出場種目の調整等を行った。昨年度の課題であったしおりの配布や引き継ぎに関しては円滑に進めた。特別顧問と委員会とのスケジュールが合わず密な打ち合わせができなかった。なお、聖路加看護大学同窓会からの助成金を運営費の一部とした。

2011 年度の体育デーは、６月１日（水）中央区総合体育館にて開催された。競技種目は、バレーボール・ワンドリバスケ・ドッジボール・台風の目・玉入れ・障害物競走・綱引き・チーム対抗リレーであった。当日は、サポーターとして募集した学生スタッフとともに各種目の審判や司会進行などを実施した。またマナー委員会による競技観戦におけるマナーの啓蒙活動も行われた。競技の結果は、１位：黄チーム（３年・学士 14 回生）２位：赤チーム（１年・大学院生）、３位：白チーム（４年・学士 13 回生）、４位：青チーム（２年・学士 15 回生）であった。

４．課題

１）特別顧問への依頼事項が遅くならないよう配慮する。

２）聖路加看護大学同窓会からの協賛金を有効に活用する（景品の検討等）。

３）当日使用する物品の事前確認を確実に行う。

４）前年度の反省を反映させた上で、スケジュールや各役割内容の引き継ぎを確実に行う。

学生支援推進プロジェクト

文部科学省　平成23年度「大学教育・学生支援推進事業」学生支援推進プログラム

地域教育力を活かした学士力および GSH 向上プログラム

１．構成員

［事業推進代表者］　井部俊子

［事業推進責任者］　菊田文夫

２．役割・職務

本学が位置する中央区築地・明石町地区は、祭礼や季節行事等の組織的な運営のため、地域住民の世代間交流

が積極的に行われている。そこで、このプログラムでは、本学の学生ひとりひとりが看護専門職者として、また、よき市民として、アイデンティティを確立できるように、地域教育力を活かした活動や学生からの提案を受けた活動について、地域住民や専門職者等のご支援をいただきながら企画実施し、学部学生全体の学士力向上と本学のGSH（Gross Students'Happiness；学生総幸福）向上を目指す。

３．活動内容

昨年度に引き続き、看護専門職者に不可欠なコミュニケーションスキルの獲得や、近い将来、職場や家庭で担うべき役割を果たすために必要とされる社会的責任感・倫理観・自己管理能力を育むための取り組みを行った。そのための具体的な内容として、下表のとおり、地域住民との世代間交流、異文化交流を進めていく「地域交流プログラム」、自分のこころとからだを護り育てていく「セルフケアプログラム」、および、応急処置・救命処置のトレーニングと日本救急医学会認定 ICLS コース資格取得を支援する「スキルアッププログラム」を盛り込んだ。

４．課題

本補助事業の最終年度に当たる本年度は、将来、看護専門職者としての活躍が期待される学生の「スキルアッププログラム」を重点的に行った。特に、昨年度購入したシミュレータ（Sim-man 3G）を自主的な学びのツールとして積極的に活用しながら、学年を超えた体験学習の場を自らの手で主体的につくりあげている学生の姿勢は、特筆すべきものである。また、昨年度と比較して、より多彩な活動プログラムに支援を行ったことにより、学生が自分のニーズに合った活動プログラムを選択し、参加することができた。

看護専門職者に不可欠な社会的責任感や倫理観を育み、学びに対するモチベーションを高めること、そして、自らのこころとからだを護り育てていく自己管理能力の醸成は、３年間の学生支援推進プログラムで取り組んできた活動をとおして、確実に効果をあげつつある。そこで来年度以降も、ICLS コースや Sim-STA の活動と医療系学生メディカルラリーの開催について、できうる限りの支援を行いたい。さらに、本学の学生が主体的に取り組んでいる社会貢献活動について広く社会に発信するための HP「聖路加看護大学・学生活動支援サイト（sl-village）」を、自らが発信する情報に責任をもって活用していけるよう継続して支援を行っていきたい。

５．資料・データ

表　2011 年度・聖路加看護大学・学生支援推進プログラム　活動プログラム等の概要

活動年月日	活動プログラム等	講師・スタッフ	参加人数
2011/5/12	Sim-STA 講習　Step1&Step2	Sim-STA　学生	12
2011/5/17			11
2011/5/27			7
2011/6/9	Sim-STA 講習　Step3	Sim-STA　学生	5
2011/6/15			7
2011/6/24			2
2011/7/2	第３回　医療系学生メディカルラリー	看護師・救急救命士等 66 名	参加者 82
		学生ボランティアスタッフ 29 名	
2011/7/6	Sim-STA 講習　前期のまとめ	Sim-STA　学生	4
2011/7/13			3
2011/7/21	第３回ICLSコース	卯野木健・四本竜一ほか	12
2011/8/6		学生ボランティアスタッフ含め 18 名	
2011/8/2	夏休みワークショップ からだを感じる	福井みどり・浦山絵里・吉野さつき	15
2011/10/12	Sim-STA 講習　Step4	Sim-STA　学生	4
2011/10/20			3

2011/11/9	Sim-STA 講習　Step5	Sim-STA　学生	4
2011/11/17			3
2011/11/18	作って学ぶ心臓解剖セミナー	北原国際病院模型部・学生	20
2011/12/1	Sim-STA 講習　ICLS	Sim-STA　学生	4
2011/12/21			3
2012/1/8	築地タウンミーティング	築地六丁目町会　12 名	12
2012/1/13	第４回ICLS コース	卯野木健・四本竜一ほか	12
2012/1/14		学生ボランティアスタッフ含め 12 名	
2012/3/27	学生活動支援サイト（sl-village）の公開		

多様な学生の学びに関するプロジェクト

１．構成員

［委員長］　菱沼典子（前期）、麻原きよみ（後期）

［委　員］　及川郁子、菱田治子、亀井智子、伊藤和弘（前期）、大久保暢子（後期）、大橋久美子（前期）、ジェフリィ・ハフマン（前期）、蜂ヶ崎令子、島田裕司、高鳥直人（前期）、櫛田智恵美、天岡　幸、中村寧孝、木暮聖子

２．役割・職務

１）多様な学生の学生生活および修学・就職支援に関すること

２）支援を行うための財源の確保と物品の調達

３．活動内容

１）聴覚障害学生の情報保障に関するニーズの把握と支援方法の検討

２）財源の確保および必要物品の購入

３）聴覚障害を持つ看護師による講演会の企画と実施

４）自治会主催の上級生向け学生自己紹介および緊急時手話講座

５）教職員向けミニ手話講座（災害編）

６）支援者確保の検討（同窓生、中央区、町田市に確認）

７）FM マイクと病院内医療機器との関連性についての確認

８）該当学生の所属委員会、サークル活動の初期サポート

９）履修状況の情報交換

10)「形態機能学演習」におけるパソコンテイクの実施（２回）

11）支援に関わる人件費、電子血圧計・FM マイク等備品の購入および DVD・ビデオ教材の文字起こしに関する検討

４．課題

１）私学事業団補助金の削減に伴い、本学での予算化が必須

２）各科目により授業の形態が異なるため個々に支援内容の検討が必要

３）講堂ならびに校舎前広場などにおいて情報伝達の困難さが生じること

４）多様学生について本学教育達成目標の確認（カリキュラム委員会にて検討が必要）

５）就職後の働き方を視野に入れた実習補助員の支援方法の検討

６）先天性心疾患を持つ学生への支援方法の検討

看護教育会議

１．構成員

看護系教員全員、聖路加国際病院看護部長･副部長、教育研修部ならびにナースマネージャー全員

２．役割・職務

主たる実習病院である聖路加国際病院看護部と連携をはかり、本学の看護教育の質の向上をはかることを目的とする。個別の実習科目については、看護部、教育研修部ならびに当該病棟との事前打ち合わせ、事後の報告・反省会を行うので、看護教育会議では実習全体の課題の共有や、看護教育界、実践現場の新しい情報を相互に提供しあう。

３．活動内容

１）会議

上記の目的で会議を４月、７月の２回開催した。参加人数は概そ４月は病院30名、大学40名、７月は病院25名、大学35名であった。

２）内容

病院からはメンバー紹介、看護部の方針、新人の採用計画、卒業生を含めた新人ナースの状況、病院の新規事業計画等の報告があった。大学からはメンバー紹介、学生数、カリキュラムの年間計画（実習計画を含む）、実習における学生の状況、研究センターの活動、高度難聴の学生の学習について、特定看護師（仮称）の動向等を報告した。

４．課題

１）双方のスタッフが集まる貴重な機会であるが、相互に報告に終始しがちであることが課題であった。本年度４月の会議はさまざまな新たな情報が共有され、有意義であったが、７月は報告に終始した。次年度は各回ともテーマの設定を工夫したい。

教育会議

１．構成員

［司　会］　菱沼典子学部長

［メンバー］本学専任教職員、客員教授、兼任教授、非常勤講師、臨床教員

［書　記］　教務部　高橋

２．役割・職務

本学専任の教職員の他に、非常勤講師、臨床教員が一同に会し、その年度の本学の活動内容および次年度の活動内容を知ってもらうこと、また、意見交換を行い本学の教育の質の向上を目指す。

３．活動内容

毎年年度末に１回開催している。2011年度は３月23日（金）16：00～17：45に開催し、以下の内容で進められた。

１）理事長挨拶

２）新理事長挨拶

３）学長挨拶

４）大学の状況報告

５）教育に関する意見交換

４．課題

非常勤講師や臨床教員に本学の活動を知ってもらうよい機会である。外部講師の出席者が少ないことは変わっていない。今回は、事前に関係者が集まり、会の進め方を検討した。情報を共有し意見交換をすることで、本学の教育の質向上に役立てていくことが目的であるが、なお一層の活発な意見交換がなされることが課題である。

実習関連ネットワーク会議

１．構成員

学長、学部長、教務部長、看護実践開発研究センター長、実習指導にあたる看護系教員、実習受入施設（病院訪問看護ステーション・助産所等）の責任者

２．役割

１）実習先の責任者と意見交換することで学生の実習状況を把握し、課題を明確にしてよりよい実習環境をつくる。

２）学部における看護教育の最新情報を実習先に提供する。

３．活動内容

原則として年に１回開催している。2011年度の開催内容は以下のとおりである。

日　時：４月22日（金）18：00～20：00

場　所：本学505・506教室

出席者：学内教員22名、実習先責任者16名、計38名

議　事：（司会　井部学長）

１）本部のカリキュラム改定について（麻原教務部長

２）看護実践開発研究センターの活動内容と継続教育プログラムについて（山田研究センター長）

３）特定看護師（仮称）試行事業調査について（菱沼学部長）

４．課題

看護教育における臨地教育の重要性から、この会議の積極的な活用をはかるための方略を考える必要がある。

看護学研究科

大学院収容定員に対する在籍者数（2011.4 現在）

修士課程

学　年	収容定員	現　員　数
１　年	㊐：15	23（5）
	㋒：15	20（1）
２　年	㊐：15	24（6）
	㋒：15	15（0）
３　年		8（8）
計	60	90（150.0%）

（　）：社会人うち数

博士後期課程

学　年	収容定員	現　員　数
１　年	10	13
２　年	10	11
３　年	10	34
		（内留年者 21）
計	30	58（193.3%）

大学院入学状況　（2011 年度入学者）

		入学志願者						
		当該大学出身者	他大学出身者			外国の学校卒	その他	計
			国立	公立	私立			
修士課程	看護学専攻	6	2	6	15	2	2	33
	ウィメンズヘルス・助産学専攻	8	0	4	9	1	2	24
博士後期課程		6	2	2	8	0	0	18

		入　学　者						
		当該大学出身者	他大学出身者			外国の学校卒	その他	計
			国立	公立	私立			
修士課程	看護学専攻	5	2	5	8	1	2	23
	ウィメンズヘルス・助産学専攻	7	0	2	4	1	2	16
博士後期課程		5	2	1	4	0	0	12

看護基礎教育機関別入学状況　（2011 年度入学者）

看護教育機関			大　学	短期大学	専門学校	なし	計
志願者数	修士課程	看護学専攻	16	7	9	1	33
		ウィメンズヘルス・助産学専攻	20	3	1	0	24
	博士後期課程		8	0	8	2	18
入学者数	修士課程	看護学専攻	14	5	4	0	23
		ウィメンズヘルス・助産学専攻	13	3	0	0	16
	博士後期課程		7	0	3	2	12

修士課程大学（学部）卒業年別入学状況（2011 年度入学者）

大学卒業年度		2011年３月 大　学　卒	2010年３月 大　学　卒	2009年３月 以前大学卒	その他＊ (外国卒等)	計	左記のうち 有職者数
志願者数	看護学専攻	1	2	25	5	33	33
	ウィメンズヘルス・助産学専攻	19	0	2	3	24	5
入学者数	看護学専攻	0	2	18	3	23	23
	ウィメンズヘルス・助産学専攻	13	0	0	3	16	3

＊その他に大学評価・学位授与機構を含む

研究生等の学生数（2011 年度）

研　究　生		計
学部卒以上	左記以外	
0	4	4

※４名全員修士課程修了者

大学院修了者数

修 士 課 程		博士後期課程 (学位授与)	博士後期課程 (単位取得後退学者)	論文博士 (学位授与)
看護学専攻	24 うち社会人７	13（2）	5	1
ウィメンズヘルス・助産学専攻	15			

（　）内は学位授与者のうち単位取得後退学後再入学し学位を受けたもの

大学院科目等履修者受け入れ状況

授業科目	単位数	履修者数	単位取得者数
精神看護学特論Ⅲ	2	1	1
精神看護学実習	6	1	1

研究生受け入れ状況

指導教授	研究生数
井部俊子教授	1
田代順子教授	1
及川郁子教授	1
松谷美和子教授	1

大学院受入状況

	修　士　課　程			博士後期課程	研　究　生
	学内推薦	Ⅰ 期	看護学専攻Ⅱ期 ウィメンズヘルス・助産学専攻２次		
募集要項配付期間	2011年 ６月～７月	2011年７月～ 2012年２月	2011年７月～ 2012年２月	2011年 ７月～10月	2010年９月～ 2011年２月
願書受付期間	2011年７月１日 ～７月７日	2011年９月１日 ～９月８日	2012年２月９日 ～２月16日	2011年９月26日 ～10月３日	2012年１月10日 ～２月10日
募　集　人　員	若干名	㊇：　12 ㊉：　15	㊇：　３名 ㊉：若干名	10	—
志　願　者　数	㊇：0 ㊉：1	㊇：　22 うち社会人　9 ㊉：　20 うち社会人　1	㊇：　6 うち社会人　2 ㊉：　2 うち社会人　0	13 うち社会人　4	1 (継続１名を含む)
受　験　者　数	㊇：0 ㊉：1	㊇：　21 うち社会人　8 ㊉：　18 うち社会人　1	㊇：　6 うち社会人　2 ㊉：　6 うち社会人　0	13 うち社会人 4	—
合　格　者　数	㊇：0 ㊉：1	㊇：　16 うち社会人　5 ㊉：　9 うち社会人　0	㊇：　5 うち社会人　1 ㊉：　5 うち社会人　0	12 うち社会人 3	—
補　欠　者　数	0	㊇：　0名	0名	－	—
入　学　者　数	㊇：0 ㊉：1	㊇：　15 うち社会人　5 ㊉：　9 うち社会人　0	㊇：　5 うち社会人　1 ㊉：　5 うち社会人　0	12 うち社会人３名	1 (継続１名を含む)

㊇：看護学専攻　　㊉：ウィメンズヘルス・助産学専攻

がんプロフェッショナル養成プラン

１．構成員

［運営委員］　林　直子

［評価委員］　山田雅子

［インテンシブコース担当］　大畑美里、本田晶子

［事務局］　高木裕也

２．役割・職務

本学は平成19年度より文部科学省が助成する「がんプロフェッショナル養成プラン」において、北里大学を事業推進代表校とし全９大学から成る【南関東圏における先端的がん専門家の育成】に参画してきた。当該９大学のうち看護系大学院を設置する北里大学、慶應義塾大学とともに[南関東がん看護教育トライアングル＞を結成、大学院教育ならびに現任教育、継続教育、さらには研究活動において協働、教育の相互交流を図ってきた。

３．活動内容と成果

１）連携大学および米国臨床看護師との教育連携

がん診療に携わる看護師を対象として、９月に「がん遺伝看護セミナー」を開催した。48名の参加があり、がんプロ連携大学である慶應義塾大学大学院健康マネジメント学科の教授をはじめ、がんプロ参画大学の教員を招聘し、遺伝子診断を受けるがん患者とその家族に対するケアに関する最先端の知識を得

る機会を提供した。

また、３月には、米国 UCSF ならびに Yale 大学から NP であり CNS であるがん看護専門職、本邦の生殖医療医、日本生殖看護学会理事長（本学森教授）、不妊症看護認定看護師を招聘し「がんの生殖看護国際セミナー」と「APN 教育に関するセミナー」を開催、それぞれ61名，20名の参加があった。セミナーを通じて、日米の臨床および研究、教育の現状と課題について意見交換を行った。

２）がん看護専門看護師・がん化学療法看護認定看護師の育成

大学院修士課程がん看護専門看護師コース３年次の社会人学生１名が、本コースを履修し、がん化学療法に携わる看護職の職業的曝露に関する課題研究を行った。なお、同コースを修了し今年度がん看護専門看護師の資格試験に合格したものは３名である。

また、がん化学療法看護認定看護師教育課程として教育コース（615時間、受講者27名）を実施した。なお同コース修了者のうち今年度資格取得者は25人である。

３）がん看護専門職者の継続教育

がん看護専門看護師コース修了後認定審査を受けるcandidatesやがん看護専門看護師を対象にした事例検討会（３回/年）、CNS が主催するコンサルテーション事業を開催した。１月には、がん化学療法看護認定看護師を対象に「スキルアップセミナー」を行い、80名の参加があった。最新のトピックスを学ぶとともに、認定看護師間の交流を図る機会を得た。

４．課題

日々進歩するがん医療において、より高度な実践力が求められることから、本課程修了後の継続的なフォローアップ体制を確立していくことが課題である。また、コース受講生の継続的獲得ならびに増加も今後の課題である。

組織的な若手研究者等海外派遣プログラム

組織的な若手研究者等海外派遣プログラム「市民参画型ケアを推進する看護学若手研究者の育成」に関する委員会

１．構成員

［委員長］菱沼典子

［委　員］井部俊子、麻原きよみ、山田雅子、田代順子、堀内成子

［事務局］　研究支援室　高木裕也、教務課　中島薫

２．役割・職務

2009 年度末に日本学術振興会の組織的な若手研究者等海外派遣プログラムに採択された。本プログラムの効果的な施行を協議、運用し、プログラムの目的を達成することが、本委員会の任務である。

１）派遣課題の募集と採用の決定

２）派遣結果の評価

３）本プログラムの公開

３．活動内容

１）派遣課題の募集を２回行った。応募課題に対し、選定基準に従い採否と、派遣費用の決定を行った。

２）派遣結果の評価として、学会発表や論文作成の成果を追跡した。

３）ホームページで、本プログラムについて紹介し、派遣課題を公表した。

４．課題

本プログラムが2012年度（2013年２月まで）までのものであることから、2012年度の派遣の見通しを立てて活動した結果、本プログラムに求められる水準に達する見込みである。また本プログラムの支援を得て、博士論文ならびに修士論文が提出され、プログラムの有用性が認められた一方、本プログラム終了後、教員・博士研究員・院生の海外派遣が困難になることが、課題である。

５．資料

表１　応募件数・採用件数

	2011年度（第１回）	2011年度（第２回）
応募件数	15	6
採択件数	11※	6

※辞退１件含む

派遣課題一覧

氏名	派遣期間	派遣先		研究テーマ	研究成果
大橋　久美子 助教	2011/10/6 ～2011/12/9	米国	ラトガース大学	米国の看護教育と臨床実践におけるモーニングケアに関する調査	
小黒　道子 助教	2011/10/24 ～2011/12/22	ミャンマー連邦	Ba Wa Thit Myanmar Christian Council Myanmar Positive Network	ミャンマーの母子に HIV／AIDS が及ぼす影響と生活実態―都市部と国境付近の比較に焦点をあてて―	
堀　成美 助教	2012/2/18 ～2012/4/21 (2011～2012年度)	オランダ	ライデン大学	EU 圏の感染症予防における看護専門職の育成・実践とその拡大	
眞鍋　裕紀子 助教	2011/3/6 ～2011/5/4 (2011～2012年度)	英国	マンチェスター大学	重症心身障害児の治療の選択における看護援助について	
新福　洋子 博士研究員	2011/8/13 ～2011/9/16	タンザニア	ムヒンビリ健康科学大学	タンザニア農村地区における母親たちの出産体験に対する認識	
Karyadi 博士後期課程３年	2011/2/26 ～2011/4/28 (2010～2011年度)	インドネシア	国立イスラム大学	Students' Perception of the Physiology Courses in Nursing Program	
Maftuhah 博士後期課程３年	2011/3/27 ～2011/6/8 (2010～2011年度)	インドネシア	国立イスラム大学	A Structure Model of Novice Nurses' Job Factors in Indonesia	"Perceived Working Conditions of Nurses in Indonesia: Multiple Group Analysis using Structural Equation Modeling"2011 年度聖路加看護大学大学院看護学研究科学位論文（博士論文）
Yenita Agus 博士後期課程３年	2011/3/26 ～2011/4/27 (2010～2011年度)	インドネシア	国立イスラム大学	Women's Perception Related to Traditional Beliefs During Pregnancy in Rural Area Indonesia	
瀬戸山　陽子 博士後期課程３年	2011/8/8 ～2011/8/13	米国	CDC 2011 National Conference on Health Communication, Marketing, and Media	がん患者のソーシャルメディア利用とソーシャルサポート及び QOL の関係	「乳がん患者のソーシャルメディア利用とソーシャルサポート及び QOL の関係」2011 年度聖路加看護大学大学院看護学研究科学位論文（博士論文） 「乳がん患者のソーシャルメディア利用とソーシャルサポート及び QOL の関係」第 10 回医療経済研究会（2012/3/23）

糸井　和佳 博士後期課程１年	2011/8/3～ 2011/8/14、 2011/9/3～ 2011/9/25	米国	ミシガン大学老年学センター 世代間交流スクール（TIS）	世代間交流スクールにおける地域高齢者参画型世代交流支援と認知症高齢者の学際的チームアプローチ研究	糸井和佳、亀井智子、田高悦子（2012）「米国クリーブランド The Intergenerational School における世代間交流活動の実際と特徴」路加看護大学紀要、38、76-80
加藤木　真史 修士課程３年	2011/8/8 ～2011/9/1	英国	St. Mark's Hospital	Enhanced Recovery After Surgery プロトコール適応となる大腸手術患者の早期離床の実態と述語回復～英国と日本の２施設における事例研究～	「大腸術後患者の早期離床」 2011 年度聖路加看護大学修士論文
水谷真由美 修士課程２年	2011/4/17 ～2011/4/30	インドネシア	国立イスラム大学	Barriers and Promoting Factors Towards Healthy Eating Lifestyle of Indonesian Women with Type 2 Diabetes	"Healthy Eating lifestyle of Women With Type 2 Diabetes in a City of West Java, Indonesia"2011 年度聖路加看護大学大学院看護学研究科学位論文（修士論文）
水谷真由美 修士課程２年	2011/7/1 ～2011/8/4	インドネシア	国立イスラム大学	Barriers and Promoting Factors Towards Healthy Eating Lifestyle of Indonesian Women with Type 2 Diabetes	
千吉良　綾子 修士課程２年	2011/8/3 ～2011/8/14	米国	ミシガン大学老年学センター	ミシガン大学老年学センターを拠点とした高齢者を中心とした施設・在宅看護と学際的チームアプローチについて	亀井智子、梶井文子、山本由子、松本美香、糸井和佳、千木良綾子、金盛琢也、渡邉麗子（2012）「米国ミシガン大学老年医学センターおよび関連施設における高齢者を中心とした高度実践看護と学際的チームアプローチ研修報告－老年看護学大学院教育への応用－」聖路加看護大学紀要、38、29-33
増澤　祐子 修士課程２年	2011/7/19 ～2011/7/29	米国	オレゴンヘルスサイエンス大学看護学部助産学研究室（国際協働論）	乳がん患者の妊娠・出産の支援	「乳がん患者の妊娠・出産の支援　～看護職者への啓発リーフレット試作版の作成～」 2011 年度聖路加看護大学大学院看護学研究科課題研究
竹内　博美 修士課程３年	2011/8/17 ～2011/8/25 （2010 年度採択者/2011 年度派遣）	英国	Maggie's Cancer Caring Centres	英国におけるがん患者やその家族への市民参加型の支援施設 ' Maggie's Cancer Caring Centres ' の視察、実態調査	
忍田　祐美 修士課程１年	2011/8/31 ～2011/9/21	バングラデシュ	Grameen Caledonian College of Nursing	バングラデュ、ダッカ在住の急性期疾患患者のための効果的な看護介入を探求する	

アジア・アフリカ学術基盤形成事業
（事業期間：３年間、平成 23 年度から 25 年度）

１．構成員、および２．役割・職務

［日本側］

コーディネーター：母性看護、助産学・教授・堀内成子（全体統括）学内協力者：松谷美和子（教育課程の開発と評価）、江藤宏美（助産教育・研究の評価）、長松康子（教育課程の開発）、小黒道子（助産教育の開発）、八重ゆかり（臨床疫学の教育）

［相手国側］

国名：タンザニア：Muhimbili University of Health and Allied Sciences

コーディネーター：School of Nursing・Professor, Sebalda Leshabari（統括、助産教育・研究の開発）

３．活動内容：タンザニアの母子保健改善に貢献する持続的な若手研究者の育成

１）体制つくり　聖路加看護大学にアジア・アフリカ助産研究センターを立ち上げ、ビジョン、ミッションを明確にし、相手国との協力体制の土台を築いた。国際助産師連盟南アフリカ大会に参加し、共同研究やカリキュラム作成について共通の目的を確認した。

相手国から４名を招聘し、母子保健・助産教育について情報交換することを通じて相手国の現状に対する国内研究者の理解を深めた。日本国の助産教育・実践の見学からアイディア構築の機会となり、協働で大学院助産修士課程カリキュラムの作成を行った。

２）学術面の成果「Women-centered care と Humanization of childbirth」を中心概念としたカリキュラム原案とタンザニア助産修士課程発足までの道のりをアクションプランとして作成し、さらに「Evidence-based practice」を組み込んだ修正案を完成させた。帰国後に開催されたステークホルダーミーティングによりタンザニア保健省、助産協会、医師会、教育者や臨床家からの承認を得ることができた。また、タンザニアの思春期生徒への性教育プログラムの開発と評価に関する研究成果を海外学術誌に公表した。

３）若手研究者養成　相手国側若手研究員を２名招聘し、日本の助産教育課程や大学院教育、助産実践を紹介し、人材が少なく出産の多いタンザニアにおいて、どのように応用可能かが話し合われた。招聘した相手国の学部長は交流の最後に、「われわれが目指すべき“光”を聖路加看護大学で見つけることができた」と述べた。タンザニアは、高い妊産婦死亡率、深刻な教員・助産師不足、劣悪な労働環境など様々な問題に直面しているが、交流を通して、問題に立ち向かっていくタンザニア側のリーダーたちとの交流基盤を形成することができ、彼らが進みたいと考える道やアイディアを構築するための情報共有ができた。

４．課題　２つの国でのカリキュラム展開時期が異なるため、招聘や派遣時期を決めることに困難が生じた。研究費の会計処理の仕組みが異なったため、事業開始当初にルール作りが必要であった。メールやスカイプを通じて、密接な連絡をとって事業を進めていくことが必要である。

５．データ：

事業経費：5,500,000 円

専門的看護師・薬剤師等医療人材養成事業
「チームビルディング力養成プログラム」推進委員会

１．構成員

［委員長］　亀井智子

［委　員］　萱間真美、山田雅子、片岡弥恵子、宇都宮明美、飯岡由紀子、菱沼典子

［事務局］　教務課　森川雪絵、秋山敦司、ケスラー理世

２．役割・職務

2011年度に文部科学省専門的看護師・薬剤師等医療人材養成事業に応募し、修士課程の上級実践コースを対象にした「チームビルディング力育成プログラム」が採択された（申請8月、補助金交付12月）。本プログラムの具体的な教育内容、効果的な施行時期等を協議し、プログラムの運用を推進する目的で、2011年11月に本委員会が設置された。

１）プログラムの具体案を研究科委員会に提案

２）2012 年度のシラバス作成

３）大学院実習関連ネットワーク会議の開催

4）2012 年度実施の準備

3．活動内容

6回の委員会を開催した。

1）プログラムの内容について、システムズアプローチ２コマ、PCC 特講１コマ、学際的チーム推進チャレンジプログラム２泊３日での集中講義(演習を含む)、モデルとなるチーム医療現場の見学から成る１科目を、１年次に開設することになった。実習、課題研究は、各領域でチームビルディング力を強化することとした。

2）特別講義「チームビルディング（１単位30時間）」のシラバスを作成した。

3）３月19日(月)18－20時、大学院実習関連ネットワーク会議を開催した。参加者は臨床教員等学外実習指導者19名、学内教員16名であった。実習上の課題の討議とチームビルディング力育成プログラムの説明ならびに実施への協力を依頼し、プログラムへの意見を得た。4）学際的チーム推進チャレンジプログラムの実施に関し、亀井、片岡がミシガン大学で打ち合わせを行った。モデルとなるチーム医療実施等での見学の可能性を打診した。

4．課題

1）次年度プログラムが予定通りに進行できるよう、十分配慮する。

2）本プログラムに関する情報を、HP 上で公開する。

3）次々年度に向けてプログラムを評価の上、改善を図る。

看護実践開発研究センター

運営委員会

1．構成員

［センター長］　山田雅子

［研究科長・WHOコラボレーティングセンター長］　菱沼典子

［PCC 実践開発部門長］　亀井智子

［研究活動支援部門長］　有森直子

［キャリア開発支援部門門長］　松谷美和子

［WHOコラボレーティングセンター事務局］　田代順子

［研究センター専任研究員］　八重ゆかり、田代真理、實崎美奈、大畑美里、本田晶子

［研究支援室係長］　高木裕也

［オブザーバー］　山口喜義事務局長

2．役割・職務

看護実践開発研究センター運営委員会規定第３条に基づき、センター運営の基本方針に関すること、事業計画に関することなど、センター運営に関して審議した。

3．活動内容

11回の運営委員会を開催した。今年度研究センター運営上の論点は下記のとおりであった。

1）聖路加・テルモ共同研究事業として実施する事業について、これまでは、21世紀 COE における活動を継続する方法を取ってきたが、2012年度からは予算の配分の公平性を加味し、公募とした。

2） WHO コラボレーティングセンター更新申請にあたり、学部から研究センターに委嘱機関を移行した。

3）議論の効率化をねらい、研究センター運営委員会として使っていた委員会活動時間を、全体会、キャリア開発支援部門会議、PCC 実践開発部門会議で時間を分配して討議を行った。研究活動支援部門はセンター専任研究員が担当していることもあり、その他の時間で会議を開催した。

4）東日本大震災後、福島県災害支援プロジェクトを大学として実施することなり、研究センターの PCC 実践開発部門の活動として取り組んだ。

4．課題

次年度より、WHO コラボレーティングセンターとしての機能を研究センターで担うことになり、アジアにおけるプライマリー･ヘルス･ケアの拠点として、適切な情報発信機能を充実していくことが課題である。また、福島県災害支援プロジェクトも継続することとなり、メンバーの強化を図りながら、現地が必要としている支援の展開と行い、より多くの学生がこの活動に参加できるような基盤を築くことを目指したい。

次年度で研究センター長の任期が終了することを見込んだ業務整理、さらに、研究センター10周年(2013年)に向けた記念行事の開催についても検討する必要性が考えられる

5　資料・データ

表１　看護実践開発研究センター運営委員会各回の主な議題

回数	開催日	議　　題
第 1 回	4 月 12 日	2011 年度部門長について 2011 年度の組織と役割について 2011 度の研究センター運営委員会の進め方について 福島災害支援プロジェクトについて 客員研究員・博士研究員の承認
第 2 回	5 月 10 日	客員研究員・博士研究員の承認 学生の実習あるいは研究受け入れに関する申請書について
第 3 回	6 月 14 日	博士研究員の教育について 客員研究員の承認 博士研究員の承認

第４回	７月 12 日	2012 年度　聖路加・テルモ共同研究事業公募のしくみについて
第５回	９月 13 日	「聖路加・テルモ共同研究事業の公募のしくみ」について
第６回	10 月 11 日	「聖路加・テルモ共同研究事業の公募」について WHOコラボレーティングセンターの今後の方向性をどのように検討するかについて
第７回	11 月８日	2012 年度 研究センター事業・聖路加テルモ共同研究事業「事業計画書」・予算（案）について
第８回	12 月 13 日	2012 年度 研究センター事業・聖路加テルモ共同研究事業「事業計画書」・予算（案）について WHOコラボレーティングセンターと研究センターの在り方について
第９回	１月 10 日	WHOコラボレーティングセンター報告書及び申請書について
第 10 回	２月 14 日	感染管理認定看護師教育課程について 2011 年度センター報告書原稿依頼について 2011 年度年報について
第 11 回	３月 13 日	2012 年度部門長について WHOコラボレーティングセンターの更新について 博士研究員の承認

表２－１　専任・兼任研究員および研究テーマ一覧（文部科学省科学研究費助成事業[補助金・基金＞）

氏　名	代表・分担	研究テーマ	研究種目
浅井　宏美	代表	ファミリーセンタードケア実践のための教育プログラムの開発	若手研究Ｂ
麻原きよみ	代表	「公衆衛生看護の倫理」教育のモデル構築と検証：カリキュラム・教育方法・教材の開発	基盤研究Ｂ
麻原きよみ	代表	保健師の倫理的実践に関わる自治体行政組織のエスノグラフィー	挑戦的萌芽
有森　直子	代表	女性のリプロダクション健康課題の意思決定支援教育コンソーシアムとプログラム検証	基盤研究Ｂ
井部　俊子	代表	わが国の病院に勤務する看護師の交替制勤務のあり方に関する研究	基盤研究Ｂ
飯岡由紀子	代表	女性生殖器系がんサバイバーのためのテーラーメイドケアの開発と評価	基盤研究Ｂ
飯岡由紀子	代表	セルフトリートメントシステムの開発－ホルモン治療中の乳がん患者に焦点をあてて－	挑戦的萌芽
五十嵐ゆかり	代表	多文化共生社会に望まれる外国人ケアを習得するための周産期看護者教育プログラム	若手研究Ｂ
江藤　宏美	代表	ハイブリッドセンシングを用いた乳幼児睡眠のビデオ画像自動評価システムの開発と適用	基盤研究Ｂ
江藤　宏美	分担	現場変革に活かす新生児がリードするラッチングと母乳育児支援の効果検証（研究代表者：井村真澄）	基盤研究Ｂ
及川　郁子	代表	小児看護における外来看護師育成支援プログラムの開発	基盤研究Ｂ
及川　郁子	分担	小児医療における病院/在宅/地域/をつなぐ高度実践看護師クリニックのシステム構築（研究代表者：片田範子）	基盤研究Ａ
及川　郁子	分担	子どものヘルスプロモーションのための予防接種介入プログラム・ガイドラインの作成(研究代表者：川口千鶴)	基盤研究Ｃ
大久保暢子	代表	脳卒中背面開放座位ケアプログラムの定着を促す看護師支援ツールの開発と評価	基盤研究Ｃ

大隅　　香	代表	妊産婦が安心できる助産師のワーク・ライフ・バランス実現に向けたアクションリサーチ	若手研究Ｂ
大橋久美子	代表	看護師の行うモーニングケアの実態調査：術後回復を促すモーニングケアの導入にむけて	若手研究Ｂ
大森　純子	代表	新興住宅地の向老期世代を対象とした“地域への愛着”を育む健康増進プログラムの開発	基盤研究Ｂ
小野　智美	代表	日帰り手術に向けての幼児の自律性を支援する看護介入プログラムについての効果研究	基盤研究Ｂ
小野　智美	代表	大都市・都市部以外に居住する幼児の経皮水分蒸散量（TEWL）の基礎的調査	挑戦的萌芽
小野　智美	分担	プレパレーションの普及―モバイルｅラーニングを応用した実践と評価―（研究代表者：蛯名美智子）	基盤研究Ｂ
亀井　智子	代表	長期テレナーシングによる在宅呼吸不全患者の増悪予防効果の検証とガイドライン創生	基盤研究Ｂ
亀井　智子	分担	都市部における世代間交流プログラム実践評価指標と視覚教育媒体の有効性の検証（研究代表者：糸井和佳）	基盤研究Ｃ
梶井　文子	代表	在宅認知症高齢者のための学際的チームの連携強化を支援する評価システムの開発と検証	基盤研究Ｂ
片岡弥恵子	代表	DV女性と子どもの生き抜く力を支えるアドボカシープログラムランダム化比較試験	基盤研究Ｂ
萱間　真美	代表	看護学の知識体系を構築するための質的研究方法を用いた学位論文指導プログラムの作成	基盤研究Ｂ
小林　真朝	代表	生活習慣特性を活用したコミュニティ支援プログラムの開発と評価	若手研究Ｂ
佐居　由美	代表	安楽ケア実践力を育む看護基礎教育プログラムの構築	基盤研究Ｃ
實崎　美奈	代表	不本意に治療を中断する不妊症患者夫婦の要因分析：治療開始から１年後までの追跡調査	基盤研究Ｃ
田代　順子	代表	看護プロフェッショナルに向けた遠隔臨地実習のウェブ基盤学習支援の開発と評価	基盤研究Ｂ
田代　順子	代表	インドネシアの看護・助産強化モデル開発とPHC専門看護師育成の協働的開発	挑戦的萌芽
角田　　秋	代表	訪問看護師による精神疾患を有する人への電話相談の効果評価	若手研究Ｂ
鶴若　麻理	代表	アジアの高齢者の終末期医療をめぐる事前指示に関する国際比較研究	若手研究Ｂ
中山　和弘	代表	ヘルスリテラシー不足の患者・家族・市民を発見・支援する看護学習コンテンツ開発	基盤研究Ｂ
長松　康子	代表	困難が重積する中皮腫に関する看護職向け教育プログラムの開発と評価	基盤研究Ｃ
野田有美子	代表	経口摂取に替わる栄養管理の導入を検討する患者・家族の意思決定支援ガイドの開発	研究活動スタート支援
蜂ヶ崎令子	代表	点滴スタンド提供方法に関するモデルの提案	若手研究Ｂ
林　　直子	分担	オンライン学習と電子メール相談による子宮頸がんに対するリスクコントロールの促進（研究代表者：稲吉光子）	基盤研究Ｂ

林　　直子	分担	乳がん早期発見のための乳房セルフケア促進プログラムの開発と妥当性の検討（研究代表者：鈴木久美）	基盤研究B
平林　優子	代表	慢性疾患幼児の在宅における療養行動発達支援を家族と協働する外来看護システムの開発	基盤研究Ｃ
蛭田　明子	代表	周産期喪失後の危機的状況を夫婦で歩み新たな家族をつくる物語	基盤研究Ｃ
廣瀬　清人	代表	集団パラダイムにおける昔話の意味世界と心理機能	研究成果公開促進費（学術図書）
堀内　成子	代表	晩産化妊婦の心と身体を充電するプログラムの産後うつ病重症化への予防効果	基盤研究Ｂ
堀内　成子	分担	日本人体験者のナラティブに基づくペリネイタル・ロスのケアガイドラインの開発（研究代表者：太田尚子）	基盤研究Ｂ
堀内　成子	代表	タンザニアでの持続的な若手助産研究者教育課程の開発と評価	挑戦的萌芽
松谷美和子	代表	看護学士号をもつ新人看護師に求められる臨床実践能力開発のための学習モデルの研究	基盤研究Ｂ
永森久美子	代表	長期的な子産み子育て力につながる「女性を中心としたケア」の実証	基盤研究Ｃ
森　　明子	代表	妊娠を望む女性の気がかりとプレコンセプション・サポートの検討	基盤研究Ｃ
八重ゆかり	代表	看護ケア・エビデンス創出のための臨床研究と系統的レビューの基盤づくりに関する研究	研究活動スタート支援
山本　由子	代表	在宅高齢糖尿病患者のインスリン療法導入時評価指標の開発と映像媒体の利用効果	基盤研究Ｃ
柳井　晴夫	代表	臨地実習適正化のための看護系大学共用試験CBTの実用化と教育カリキュラムへの導入	基盤研究Ａ
柳井　晴夫	分担	医療の高度化に伴う看護系大学の高大接続問題－看護職志望者の適性と大学入試－（研究代表者：倉元直樹）	基盤研究B

表２－２　専任・兼任研究員および研究テーマ一覧（厚生労働科学研究費補助金）　　○：専任研究員

氏　名	代表・分担	研究テーマ	研究種目
梶井　文子	分担	高齢者の経口摂取の維持ならびに栄養ケア・マネジメントの活用に関する研究（研究代表者：葛谷雅文）	長寿科学総合研究事業
梶井　文子	分担	チームによる効果的な栄養ケア・マネジメントの標準化をめざした総合的研究～大学ー施設連携による研究基盤・人材育成システムの構築のために～（研究代表者：吉池信男）	長寿科学総合研究事業
亀井　智子	分担	認知機能低下高齢者への自立支援機器を用いた地域包括的ケアシステムの開発と評価（研究代表者：藤原佳典）	厚生労働科研、認知症対策総合研究事業
萱間　真美	代表	アウトリーチ（訪問支援）に関する研究	障害者対総合研究事業
萱間　真美	分担	精神保健医療福祉体系の改革に関する研究（研究代表者：竹島正）	障害者対総合研究事業

萱間　真美	分担	新しい精神科地域医療体制とその評価のあり方に関する研究（研究代表者：安西信雄）	障害者対総合研究事業
堀内　成子	分担	「チーム医療の推進における看護師等の役割拡大・専門性の向上に関する研究」分担研究（池ノ上克：宮崎大学）班：「助産師による会陰裂傷縫合に関する調査」	地域医療基盤開発推進研究事業
山田　雅子	分担	チーム医療の推進における看護師等の役割拡大・専門性向上に関する研究（研究代表者：本田彰子）	地域医療基盤開発推進研究事業
山田　雅子	分担	訪問介護の基礎強化に関する調査研究事業～「訪問看護支援事業」の支援・評価とその普及～（研究代表者：川村佐和子）	老人保健健康増進等事業

表２－３　専任・兼任研究員および研究テーマ一覧（その他の研究課題）

氏　名	代表・分担	研究テーマ	研究種目
麻原きよみ	分担	災害時下の看護職に対する放射線教育のアクションリサーチ（研究代表者：小西恵美子）	平成 23 年度 ファイザーヘルスリサーチ振興財団研究助成、国内共同研究
池口　佳子	代表	在宅ホスピス看護師が臨死期・死別期に行う Death Education のアセスメントとその内容	聖路加看護学会看護実践科学研究助成基金
井部　俊子	代表	急性期病棟における高齢者の不穏症状の出現と対応に関する調査	日本赤十字看護学会　研究助成金
井部 俊子	共同研究者	被災地の仮設住宅・借り上げ住宅などに住む被災者の健康と心のケア支援に関する活動	笹川記念保健協力財団 東日本大震災 被災者支援に関する研究助成
江藤　宏美	代表	分娩後出血対応のアルゴリズムに関する教育プログラムの開発～対面式講義と e-learning の比較～	聖路加看護学会看護実践科学研究助成金
大森　純子	分担	災害時下の看護職に対する放射線教育のアクションリサーチ（研究代表者：小西恵美子）	平成 23 年度 ファイザーヘルスリサーチ振興財団研究助成、国内共同研究
亀井　智子	代表	都市部における効果的な世代間交流看護支援方法の開発と普及; 日米の継続的世代間交流実践プログラムの分析から	聖路加看護学会看護実践科学研究助成基金
萱間　真美	代表	精神障害者退院促進支援事業	東京都中央区事業委託
田代　順子	分担	「我が国の国際保健協力人材の継続的確保に関する研究」（主任研究者：仲佐保）　分担研究テーマ「国際看護・助産学専門職キャリアパスモデル開発」	国立国際医療センター 国際医療研究開発費　22 指６

表２－４　客員研究員および研究テーマ一覧

分　類	氏　名	研究テーマ	学内共同研究者	所属
PCC 開発	小林　紀子	母乳育児・母乳育児支援	堀内　成子	小林紀子助産院
	横塚　夏奈	母子に対する母乳育児支援	堀内　成子	助産師　横塚夏奈
	石井　慶子	不妊患者・周産期死別体験者のメンタルヘルスとサポート、グループ・ファシリテーター養成	堀内　成子	お空の天使パパ＆ママの会

PCC 開発	堀内　祥子	女性への心理的サポート、心的外傷後ストレス障害（PTSD）	堀内　成子	ペリネイタル・ロス研究会
	今村美代子	周産期死亡において子どもを亡くした家族へのケア	堀内　成子	ペリネイタル・ロス研究会
	太田　尚子	日本人体験者のナラティブに基づくペリネイタル・ロスのケアガイドラインの開発	堀内　成子	静岡県立大学大学院
	北園　真希	ペリネイタル・ロスの日本人体験者のナラティブに基づいたガイドラインの開発 国内外におけるペリネイタル・ロスのケアの探索 医療職者に対する教育プログラムの実施、評価および開発	堀内　成子	聖路加看護大学ペリネイタル・ロス研究会 神奈川県立こども医療センター
	大久保菜穂子	ヘルスプロモーション	＊山田　雅子	新宿鍼灸柔整専門学校
	石井　苗子	東北地方太平洋沖地震及び福島原子力発電所事故による福島県被災者に対し、地域において看護ケアを提供するための、持続可能性のある看護師派遣プログラムの開発（仮題）	＊山田　雅子	NPO法人　日本臨床研究支援ユニット
	岩田　証子	震災被害地の看護実践活動に関する研究	＊山田　雅子	NPO法人　日本臨床研究支援ユニット
キャリア開発支援	内田千佳子	退院調整看護師の専門的役割開発プロセスについての研究	＊山田　雅子	訪問看護パリアン
	廣岡　佳代	退院調整看護師の専門的役割開発プロセスについての研究	＊山田　雅子	訪問看護パリアン
	吉田　千文	退院調整看護師の専門的役割開発プロセスについての研究	＊山田　雅子	千葉県立保健医療大学
	福田　裕子	退院調整看護師養成のためのプログラム開発	＊山田　雅子	まちのナースステーション八千代

○：専任研究者　　＊：部門長

表２－５　博士研究員および研究テーマ一覧

部　門	氏　名	研究テーマ	共同研究者
PCC 開発	新福　洋子	・晩産化妊婦の心と身体を充電するプログラムの産後うつ病重症化への予防効果 ・タンザニアでの持続的な若手助産研究者教育課程の開発と評価	堀内　成子
		看護プロフェッショナルに向けた遠隔臨地実習のウェブ基盤学習支援の開発と評価	＊田代　順子

People-Centered Care（PCC）実践開発部門

１．構成員

［部門長］　亀井智子

［事業主］　片岡弥恵子（赤ちゃんがやってくる）、堀内成子（ルカ子母乳育児相談・天使の保護者ルカの会・天使の保護者ルカの会;グリーフカウンセリング）、森　明子（ルカ子ウイメンズヘルスカフェ）、大坂和可子（乳がん女性のためのサポートプログラム）、大畑美里（リンパ浮腫ケアステ

ーション)、及川郁子(子どもの健康、知ろう、考えよう)、山本由子（高齢者とご家族へオンリーワンの「思い出帳（メモリーブック)」作りプロジェクト)、梶井文子(認知症の方のご家族のためのリフレッシュプログラム)、亀井智子(多世代交流型デイプログラム「聖路加和みの会」・転倒骨折予防実践講座、在宅酸素療法を行う方へのテレナーシング)、堀　成美(予防接種講座)、山田雅子(家で死ねるまちづくり「一歩の会」、るかなび)、高橋恵子(聖路加市民アカデミー、新健康カレッジセミナー)

2．役割

1）看護実践開発研究センターの一部門として、People-centered health care の理念にもとづく、新たな看護サービスモデルの研究的開発、および看護モデルの実践的提供を通じて、市民主導型看護ケア(PCC)のあり方を探求する。

2）専任・兼任研究員が事業主となり様々な世代にある人々の様々な健康課題に焦点をあて、ナースクリニックの場において、広く市民に看護モデルの実践的提供を行うとともに、研究成果を蓄積し、根拠のある看護を開発・創生する。

3）各事業主が本学の学部生、大学院生、学外の専門職、他大学の教員等を対象とし、PCC 活動を理解する等の目的で実践的教育・研修の場として各事業を提供する。

3．活動内容

1）事業の推進

PCC 開発担当に属する各事業は、年度計画のもとに計画的に実施・運営している。各事業の開催回数、参加者数は**表１**の通りである。今年度は、年間延べ 3,508 名の市民を対象に事業を展開した。

2）PCC 実践開発部門ミーティング

本担当に属する研究事業全体の内容や課題、および様々な対象者に安全に事業を展開するための方法について話し合うための部門ミーティングを計３回開催した。事業開始時の安全対策指針の策定、毎回の事業実施時の安全確認の方法の検討、災害発生に備えた名簿管理と館内避難路の確認、インシデント報告、次年度に向けた利用者評価の方法、会場内の危険性・不具合の検討等についての検討を行い、研究センター運営会議に報告した。

3）プログラムの Quality control(QC)

本部門に属する事業の質を維持・向上するために「構造-実践過程-成果」の各要因から事業の質評価を継続的に行っている。また、安全に看護実践を提供するために、事業開始時に各事業ごとに安全対策指針を策定し、それにもとづく安全対策指針を策定した上で、各事業を展開した。

4．課題

研究者と市民との協働により、看護実践を研究開発する上で、最も重要な要素はコミュニケーションと安全管理であると認識している。様々な限界がある中での安全対策を徹底するとともに、事業者間のミーティングを通して情報交換等を継続したい。

表１　PPC 開発担当が実施した事業

事業名	事業主	構造要因	プロセス要因			アウトカム	
		会場場所	事業主以外の学内従事者	学外従事者	プログラム	開催回数	年間参加者数
赤ちゃんがやってくる	片岡	交流ラウンジ	院生－演習履修者 学部生－性教育ゼミ履修者 大学院生・学部生ボランティア	助産所助産師	父母と子どもが参加して新生児を家族に迎えるためのクラスを提供	8 回	75 家族 (214 人)
ルカ子母乳育児相談室	堀内	相談室、家庭訪問	学部生－看護研究Ⅱ	客員研究員	授乳中の母子の育児相談（授乳、眠り、離乳食など）	150 回	訪問 60 件 来所 78 件 計 138 件
ルカ子ウイメンズヘルスカフェ	森	ぽるかルーム	教員 認定看護師教育課程（不妊症看護コース）研修生 演習として２回を企画・運営	子宮筋腫・子宮内膜症体験者の会 不育症友の会 等自助グループ	不妊、筋腫、内膜症、出生前診断など、テーマを決めて学習と話し合い	6 回	47 人

天使の保護者ルカの会	堀内	交流ラウンジ ミーティングルーム	院生(研究として参加) 学部生(家族発達Ⅱ、卒業研究として参加) 他の大学、看護職の研修	客員研究員 日本手芸普及協会 カラーセラピスト	周産期喪失を経験した家族のお話し会(小集団)	8 回	50 人
天使の保護者ルカの会;グリーフカウンセリング	堀内	ミーティングルーム		客員研究員	周産期喪失を経験した家族個人のカウンセリング	10 回	11 人
乳がん女性のためのサポートプログラム	大坂	交流ラウンジぽるかルーム本館	学部生 大学院生ボランティア	聖路加国際病院ブレストセンター・オンコロジーセンター看護師 ブレストクリニック築地看護師	・小グループに分かれて治療等の体験を分かち合う会、および専門職を招いた学習会を開催 ・先輩患者が他の患者の相談にのるピアサポートボランティアによる相談を実施	9 回	355 人
リンパ浮腫ケアステーション	大畑	相談室	教員	後藤学園 聖路加国際病院ブレストセンター	対象者のアセスメント、およびリンパ浮腫マッサージの施行	39 回	199 人
子どもの健康、知ろう、考えよう	及川	交流ラウンジまたは1号館	院生、学部生	各テーマに応じた専門家(講師) 企画者として中央区の保育園看護師・保健師・病院看護師・養護教諭など	子どもの健康に関するテーマを設定し、講義による学習会と、参加者からの質問、および話し合いの時間を設定	5 回	176 人
高齢者とご家族へオンリーワンの「思い出帳(メモリーブック)」作りプロジェクト	山本	２号館内、または参加者宅への訪問	教員	看護師	認知症をもつ高齢者の生い立ちから現在までの生活・仕事に関するライフレビューを行い、「思い出帳」を作成する。これを日常的に活用してもらい、認知症高齢者の生き方の意味づけをサポートする	28 回	7組14名
多世代交流型デイプログラム「聖路加和みの会」	亀井	ぽるかルーム 大学中庭 地域散策	院生ボランティア 学部生(生涯発達看護論Ⅱ実習) 学部生(老年看護ゼミ演習)	地域ボランティア 区書道連盟 NPO アロマセラピーサポートセンター	大学近隣に在住する小中学生、および高齢者との世代間交流を促進し、高齢者にとっては子ども世代への知恵と文化の伝承、子どもにとっては高齢者理解を促進し、互恵的ニーズを充足する看護ケアを提供し、ソーシャルキャピタルをめざす	33 回	752 人

転倒骨折予防実践講座	亀井	1 号館アーツルーム	院生・学生ボランティア	桜美林大学 浦和大学 大東文化大学 神奈川県立保健福祉大学 横浜市立大学 看護師 るかなびヘルスボランティア	1 コース 6 回制で転倒を防ぐための知識、および運動プログラムを提供する 1 回目:心身アセスメント、問診、転倒歴、転倒リスク、QOL、骨密度、開眼片足立ち時間、10 メートル歩行速度などの測定、運動プログラム 2～4 回目:健康教育＋運動プログラム 5 回目:初回から 12 週後 6 回目:初回から 53 週後	5 回	130 人
予防接種講座	堀	2 号館	教員 学生ボランティア	産科クリニック助産師	保護者やこどもの支援に関わる人を対象にした予防接種に関する基礎講座。感染症予防の基礎から個別スケジュール立案までを事例をとおして学ぶ	3 回	20 人
家で死ねるまちづくり「一歩の会」	山田	2 号館	教員	区民ボランティア	地域で暮らす高齢者のニーズに応じて話し相手、見守り、外出サポートなどを行う。またボランティアの質向上をめざし、講演会や施設見学会などを開催すると共に会報の活動報告会を通して本活動の周知を図っている	10 回	114 人
るかなび	高橋	2 号館るかなび	教員	看護師 歯科衛生士 るかなびヘルスボランティア	一般市民来所者への健康相談、血圧や骨密度等の測定と相談への対応、闘病記等の検索	10 回	765 人(2 月まで)
在宅酸素療法を行う方へのテレナーシング	亀井	患者宅	教員	聖路加国際病院呼吸器科医師	ネット端末を COPD をもつ HOT 患者に貸与し、一日 1 回心身状態の測定とデータ送信結果をもとに在宅モニタリングを行う。テレナース(教員)は、看護プロトコルに従い、テレビ電話、一般電話でテレメンタリングを提供する	延べ 271 日	2 人

認知症のご家族のためのリフレッシュプログラム	梶井	２号館ぽるかルーム	教員	看護師	認知症高齢者等を介護する家族を対象とし、認知症や介護に関する講義、および介護の悩み相談などのグループ支援を提供	8 回	25 人
聖路加市民アカデミー	高橋	アリス・C・セントジョンメモリアルホール	院生、学部生 教員、職員、研究員 るかなびコーディネーター るかなびボランティア 客員研究員	企画：テルモ株式会社 講師：市民、市議会議員、地域看護専門看護師、二十弦演奏家	一般市民対象の健康支援に関する講演会の開催 テーマ「みんなでつくる、まちの医療～行動を起こした市民に聞く～」	1 回	346 人
新健康カレッジセミナー	高橋	２号館内	教員、職員、研究員、学部生 るかなびコーディネーター るかなびボランティア	企画：テルモ株式会社 講師：聖路加国際病院医師、東京都健康長寿医療センター医師	一般市民対象の市民健康講座の開催（３回シリーズ） １）なぜ糖尿病が怖いのか ２）なぜ高血圧が怖いのか ３）効果的な運動の鍵は	3 回	150 人

キャリア開発支援部門

キャリア開発支援部門は、最新の知見を得る方法、知見を活用する方法、それらをさまざまな角度から検討して妥当な見解を引き出す方法、新しい知見を看護学生・看護職者間・協働者間で共有する方法、看護ケアを必要とする人々に新しい知見を還元していく方法を身につけ、看護専門職者としてのアカウンタビリティを高めていくことを支援する部門である。

１．２．構成員および役割・職務

表１　キャリア開発支援部門構成員

構成員	役　割	職　務
松谷美和子	部門長	部門の統括
井部　俊子	コース責任者	認定看護管理者ファーストレベル講習
八重ゆかり	専任教員	認定看護管理者ファーストレベル講習
森　　明子	コース責任者・主任教員	不妊症看護認定看護師教育課程
實﨑　美奈	専任教員	不妊症看護認定看護師教育課程
林　　直子	コース責任者	がん化学療法看護認定看護師教育課程
本田　晶子	主任教員	がん化学療法看護認定看護師教育課程
大畑　美里	専任教員	がん化学療法看護認定看護師教育課程
山田　雅子	コース責任者	訪問看護認定看護師教育課程
田代　真理	主任教員	訪問看護認定看護師教育課程
佐藤　直子	専任教員	訪問看護認定看護師教育課程
平良　智子	職　員	部門の事務
福田　昌	職　員	部門の事務

３．活動内容

今年度は、日本看護協会認定教育機関として、認定看護管理者ファーストレベル講習、および、不妊症看護、がん化学療法看護、訪問看護の認定看護師教育課程を開講した。また、ナーススキルアップ講座では４分野の専門職者を対象としてコンサルテーション（看護管理、緩和ケア、在宅看護、看護学教育）、看護管理者支援プログラム、退院調整看護師養成プログラム、事例検討会（精神看護、がん看護）、看護英語文献読解クラス（基礎編、構文理解強化）、不妊症看護および訪問看護認定看護師を対象としてスキルアップセミナー、性の健康に関する専門職者のリトリートプログラム、看護職のための予防接種講座を開講し、看護専門職者の学びの場となった。

４．課題

認定看護師教育課程受講生の確保が昨年に引き続き課題となった。受講希望があるにもかかわらず、長期研修のための人員的余裕が職場にないことが、受講者の確保を困難にしているものと考えられるため、定員の見直しが課題である。一方で、当該教育課程の特徴として、週末開講と夏季集中講義によって現任のまま受講できること、および、アクセスしやすく宿泊施設が探しやすい立地条件であることによって、遠方からの受講が可能であることが挙げられる。他施設にはないこのような利点を広く報じ、ニーズを開拓していくことが今後の課題である。

５．資料・データ

表２　キャリア開発支援部門：ナーススキルアップ講座

講座名	開催数	受講者数	修了者数
英文献を読もう！パートⅠ－基礎編	2 コース（10 回）/年	9	－
英文献を読もう！パートⅡ－構文理解強化コース	2 コース（10 回）/年	5	－
語り合おう！看護マネジメント ―看護管理者のためのサポートグループ―	5 回/年	63	－
退院調整看護師養成プログラムと活動支援	1 コース（5 回）/年	42	42
がん看護　事例検討会	3 回/年	13	－
精神看護　事例検討会	5 回/年	89	－
看護管理コンサルテーション	随時（予約制）	0	－
緩和ケアコンサルテーション	随時（予約制）	1	－
在宅ケアコンサルテーション	随時（予約制）	3	－
看護学教育コンサルテーション	随時（予約制）	0	
不妊症看護認定看護師ポストコース	1 回/年	47	
訪問看護スキルアップセミナー	4 回/年	46	
実践・在宅ケア入門～全ての対象者に緩和ケアを～	3 回/年	29	
性と健康に関わる専門職のためのリトリート講座	1 回/年	5	
聖路加感染症アカデミー 「看護職のための予防接種講座」	1 回/年	21	
看護管理塾	1 回/年	6	
合　計		380	

表３　キャリア開発支援部門：認定看護管理者講習・認定看護師教育課程

教育課程	開講期間	受験者数	合格者数	受講者数	修了者数
(認定看護管理者) ファーストレベル講習	8/22～9/28	100	99	97	96
(認定看護師教育課程) 不妊症看護コース	6/1～2/29	10	10	10	10
がん化学療法看護コース	6/1～2/29	34	28	27	27
訪問看護コース	6/1～2/29	16	16	16(1)	16
計		60	54	53(1)	53
合　　計		160	153	150(1)	149

(　)内は修了延期者の内数

研究活動支援部門

１．構成員

［部門長］　有森直子

［部門員］　八重ゆかり、高木裕也、田口　瞳

２．役割・職務

市民の健康生活の向上に資する看護の実践開発を促進するため、本学の教員ならびに研究員、大学院生の研究活動を支援する。

３．活動内容（活動実績は表１参照）

以下の⑴～⑹の活動のため、メール会議を含む４回の委員会を開催した。

⑴　研究助成金情報の提供

⑵　文部科学省及び厚生労働省の科学研究費の申請及び経理等手続きの支援

⑶　研究員及び大学院生に対する研究コンサルテーション

⑷　研究員及び大学院生に対する研究倫理コンサルテーション

⑸　研究助成に関する選考委員会規程ならびに審査手順に基づいた選考

⑹　その他

４．課題

１）研究助成金情報提供の迅速化と情報入手のためのリソース（ウェブサイト）紹介に努めた。今後はこれを維持促進するとともに、実際にどれだけ助成金の申請と獲得につながったかの把握が不十分であり、次年度から実施する予定である。

２）科研事務の課題として、研究費を公正かつ効率的に使用できるよう研究の計画的な遂行を支援すること、及び手引きの整理に努め、迅速・正確に各種手続きが進められるように支援する必要があり、次年度説明会を企画する。また、センター機能と関わる獲得研究費であっても科研費ではない場合、支援ニーズに応えられていない点も課題である。

３）今年度受けた研究コンサルテーションを通じて把握した学習ニーズに対し、臨床研究に関連した勉強会を試行したが、次年度より事業として評価する。

４）研究倫理コンサルテーションについては、本年度対応できず次年度数回にわたるクラスを企画する。

５）教職員、院生が、研究者としてどのようにステップアップするかの指標や研究者間の情報交換を活発にするような仕組みつくりについて今後検討が必要。

５．資料・データ

表１　研究支援部門活動実績

活動内容	件数	活動方法・手段等
⑴研究助成金情報の提供	29	学内メールによる周知
⑵科研費の申請・経理手続き	62※	科研事務の諸ルールに基づく
⑶研究コンサルテーション	33	研究計画に応じた対面相談
⑷研究倫理コンサルテーション	0	今年度は実施せず
⑸研究助成に関する選考	0	

※文部科研：本年度交付42件+22年度繰越５件+他機関分担分９件＝56件；厚生科研６件；計62件

ＷＨＯコラボレーティングセンター

WHO Collaborating Center for Nursing in Primary Health Care (PHC)

PHC WHO 看護開発協力センター

１．構成員

［センター長］　菱沼典子

［事務局］　国際研究部門代表　田代順子

［委　員］　長松康子、小黒道子、眞鍋裕紀子

２．目的

第５期センター目標（Terms of Reference）と事務局活動内容

１）ミレニアム開発目標達成と少子高齢化社会に貢献する看護実践モデルを開発する。

２）PHC における看護のリーダーシップを推進する。

３）個人・家族・地域のエンパワーメントを目指し、エビデンスを用いて、実践の開発と研究を行う。

４）PHC における看護・助産についての教育と実践向上するため、研究とシステム改革を支援する。

上記看護開発協力センター目標達成に向け、⑴センターの活動（PCC 開発研究）の情報の統括と、⑵WHO との連携活動を行う。

３．活動内容

１）2012年４月15日で第５期の委嘱期間終了に伴って、再委嘱申請書を作成し、３月15日に送付した（資料１）。これに伴って、第６期は再委嘱先を看護実践開発研究センターに変更した。

２）2011年度研究活動：WHO 、WPRO への報告：2010年度本看護実践開発センターでの市民主導型ケア開発研究を WHO、WPRO 本部へ年次報告書提出し、Web で公開した（資料２）。

３）Global Network 総会が、第25回 ICN 大会期間中の５月６日の午後６時より、マルタで開催された。事務局より田代が出席した。主要議題は、2012年開催の２年毎開催のホストの確認で、日本の兵庫県立大学が開催することになった。

４）国内広報として日本看護協会出版会「看護」WHO NEWS に隔月連載（資料３）。Web で公開中。

５）国際保健協力研究：2010年度：国際医療協力研究委託費研究（22指定６）の「国際保健協力人材の継続的確保に関する研究」の分担研究「国際保健協力看護・助産人材の継続的確保に関する研究」を進め、本年度研究成果を報告した。　→　国際看護・助産学コンソーシアム、ワークショップを2011年12月16日に、Dr. Kathleen Norr を招聘して、「米国における国際看護職のキャリア」をテーマに開催した。

⑸看護助産強化への教育を通しての貢献　→インドネシア、イスラム大学からの博士課程院生：博士４年1名、３年２名の留学生の支援。

６）WHO 看護開発協力センター創設 20 周年を記念して記念誌を発行した。

４．課題

１）第６期（2012～2015年度）の WHO PHC 看護開発協力センターは看護実践開発研究センターに変更し、申請した。再委嘱がされたら、WHO より再委嘱状が届く。

新体制は市民主導型看護実践（PCC）開発部門および研究センターが推進する計画である。

２）看護助産を強化のための国内国際保健看護・助産学コンソーシアム形成は、ホームページを作成し、グローバルヘルスに日本の看護の貢献を継続課題とする

５．資料・データ

資料１）　WHO 看護開発協力センター再委嘱申請書

資料２）WHO 看護開発センター2009 - 2010年報、本センターWeb サイトで公開中

資料３）日本看護協会出版会「看護」WHONEWS

	執筆者	テーマ	「看護」
2012 年 03 月	長松　康子	自然災害による健康被害の警鐘	第 64 巻 3 号
2012 年 01 年	眞鍋裕紀子	看護・助産アドバイザーKathleen Fritsch 氏来訪	第 64 巻 1 号
2011 年 11 月	小黒　道子	世界助産白書の刊行	第 63 巻 13 号
2011 年 09 月	田代　順子	第 64 回世界保健総会での「看護・助産強化」の決議事項	第 63 巻 11 号
2011 年 07 月	長松　康子	コロンビア大学 WHO コラボレーティングセンターの緊急シンポジウムを開催	第 63 巻 09 号
2011 年 05 月	眞鍋裕紀子	WHO プライマリーヘルスケア（PHC）看護開発協力センター開所 20 周年を迎えて	第 63 巻 05 号

World Health
Organization

Collaborating Centres
REDESIGNATION FORM

The redesignation form consists of three parts

Part I – Basic Information

Part II – Proposed revised terms of reference

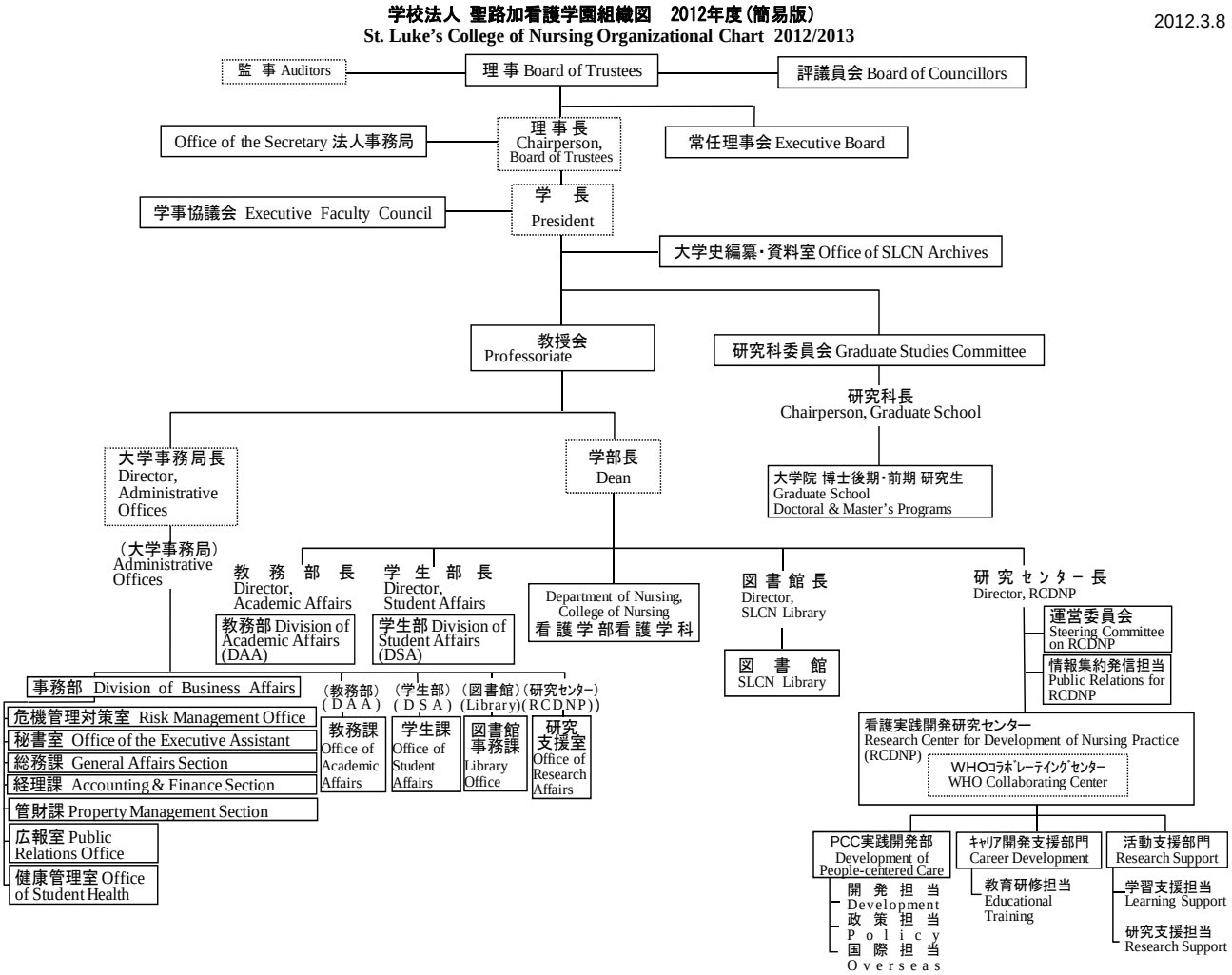
Part III – Proposed work plan

Initiation Name: St. Luke's College of Nursing
Name of Department: Research Centre for Development of Nursing Practice
City: Tokyo
Country: Japan Country ID JPN-58
Title: WHO Collaborating Centre for Nursing Development in Primary Health Care

Part I-Basic Information

1.1 Name of the Director of the institution	President
1.2 Name of the Head of the proposed WHO Collaborating	
1.3 Address of the institution	10-1, Akashi-Cho, Chuo-ku,
1.4 City	Tokyo
1.5 State/Region/ Canton/ Province	
1.6 Postal Code	104-0044
1.7 Country	Japan
1.8 Telephone	81-3-3543-6391
1.9 Fax	81-3-3543-1626
1.10 Web site	http://www.slcn.ac.jp

1.11. Organizational chart



1.12 List of professional staff of the WHO Collaborating Centre with an indication of their qualifications (do not include full CVs)

Director: Prof. YAMADA, Masako, RN, PHN, MNS,
(Director of Research Center for Development of Nursing Practice)
Associate Director: Prof. TASHIRO, Junko, RN, PHN, RMW, PhD (Global Health Nursing)
Staff: Prof. ARIMORI, Naoko, RN, CNW, PHN, PhD (Research Center)
Prof. KAMEI, Tomoko, RN、PHN, PhD (Gerontological Nursing)
Associate Prof. TAKAHASHI, Keiko, RN, PHN, PhD (Research Center)
Assistant Prof. YAJU, Yukari, RN, MPH, PhD (Research Center)
Assistant Prof. Oguro, Michiko, RN, CNM, PhD (Maternal Infant Nursing and Midwifery)

1.13 Facilities Available (e.g. laboratories, training facilities, documentation centre. etc.

Nursing skill simulation room, Library, Computer Rooms, Information network system, Laboratory, Hall, Conference room, Health volunteer service centre, Center for Asia Africa Midwifery Research, Research Center for Development of Nursing Practice

Part II – Proposed revised terms of reference

The proposed terms of reference of the WHO Collaborating Centre should be presented as bullet points and briefly describe the scope of the activities that the institution would perform as a WHO Collaborating Centre. It should give a general framework.

1. In agreement with WHO, to evaluate and develop further nursing models of People-Centered Health, based on the values of PHC, to contribute to Millennium Development Goals and Address the needs of aging society.
2. To contribute to WHOs work in furthering maximal utilization of health workers through nursing leadership in People-Centered Care and capacity-building and advancement of interdisciplinary advanced nursing practice (APN) education and service delivery.
3. To support the work of WHO in implementing research and system changes which improve the education and advanced practice of nursing and midwives in Primary Health Care (PHC).
4. To further progress toward MDG, Maternal and Child Health targets through expanded regional and global partnerships.

Part III-Proposed work plan

Activity 1-1: 1. In agreement with WHO, to evaluate and develop further nursing models of People-Centered Health, based on the values of PHC, to contribute to Millennium Development Goals and address the needs of aging population.	**Title:** Development of Health Navigation for Community Individuals **Responsible person:** Prof. YAMADA, Masako **Description :** 1) Support Health Literacy of the community using "collaborative and pervasive approaches" by collaborating teams of health oriented lay and professional volunteers, college faculty members and graduate students. 2) Conduct Learning Programs for health volunteer leaders. **Concrete expected outcome:** 1) Perceived confidence and knowledge through using the center. 2) Accomplished collaborative activities with community people or groups. 3) Increased number of educational practice sites for students. 4) Increased number of annually published research and evaluation reports to WHO describing potential applicability to other settings, countries. **Links with WHO Activities:** WHO Strategic Directions for Strengthening Nursing and Midwifery KRAs 2,3,5; WHO WPR HRH Action Plan 2011-2015, KRAs 2,4; WHO WPR OSER 10.008.WP01 **Source of funding of the activity:** St. Luke's -Terumo Collaborative Research Fund **Dissemination of the results:** Web site; Research Report ; Reports to WHO annually **Time frame of the activity:** 2012-2015

Activity1-2 : Development of a Nursing Practice Model based on People-Centered Care using values of PHC in Aging Society.	**Title:** Development of an Intergenerational care model for health promotion **Responsible person:** Prof. KAMEI, Tomoko **Description:** 'Nagomi-no-kai' provides a weekly intergenerational day program for elderly and school aged children to enhance intergenerational relationships and health promotion in an urban community. **Concrete expected outcome:** 1) Improving elder's depression and quality of life, 2) enhance children's perceptions of elders and 3) intergenerational relations for both generations. 4) Reports to WHO annually. **Links with WHO Activities:** **SWHO Strategic Directions for Strengthening Nursing and Midwifery Services KRAs 2,3,5; WHO WPR HRH Action Plan 2011-2015, KRAs 2,4 WHO WPR OSER 10.008.WP01** **Source of funding of the activity** St. Luke's -Terumo Collaborative Research Fund **Dissemination of the results** Web site; Research Report; **Time frame of the activity:** 2012-2015
Activity1-3 Development of a Nursing Practice Model based on People-Centered Care using values of PHC in Aging Society.	**Title:** Family-centered care models: **Responsible person:** Prof. OIKAWA, Ikuko & Associate Prof. KATAOKO, Yaeko **Description:** Provide and share information needed by families and develop learning tools for families to enhance their care of their infants and small children. **Concrete expected outcome** Increased knowledge for families and health care workers Propose a Child-Family Centered Care Model and Program and report to WHO annually. **Links with WHO Activities:** WHO Strategic Directions for Nursing and Midwifery Services KRAs 2,3,5; WHO WPR HRH Action Plan 2011-2015; KRAs 2,4; WHO WPR OSER 10.008.WP01 **Source of funding of the activity:** St. Luke's -Terumo Collaborative Research Fund **Dissemination of the results** Web site, Sending the handbill and poster to public and private **Time frame of the activity:** 2012-2015

Activity1-4 Development of a Nursing Practice Model based on People-Centered Care using values of PHC in an Aging Society.	**Title:** Development of women-centered care model for health promotion **Responsible person:** Prof. MORI, Akiko & Prof. HAYASHI, Naoko **Description:** 1) Health Promotion during the Reproductive Age: Provide women space and time to talk and share experiences about reproductive health using collaboration with nursing professionals and peer support groups. 2) Health Promotion for Women Surviving Cancer: a) Provide a Support Program for women living with breast cancer by focusing on: Emotional support; strengthening their adaptation to the disease and providing lymph edema care. **Concrete expected outcome:** 1) Obtain knowledge and information; 2) Improved adjustment and strategies for self-care; 3) Relief from stress or social pressure; 4) Promote partnership between women and nurses or midwives; 5) Reports to WHO annually. **Links with WHO Activities:** WHO Strategic Directions for Nursing and SDSNW KRAs 2,3,5; WHO WPR HRH Action Plan 2011-2015, KRAs 2,4; WHO WPR OSER 10.008.WP01 **Source of funding of the activity:** St. Luke's -Terumo Collaborative Research Fund **Dissemination of the results** Website Meeting Annual reports; News letter; Research report **Time frame of the activity:** 2012-2015
Activity 1-5 Development of elderly-centered care model for home care & health promotion	**Title:** Development of elderly-centered care model for home care & health promotion **Responsible person:** Prof. KAMEI, Tomoko & Associate Prof. KAJII, Fumiko **Description:** 1) 'SAFTETY ON! 'Program: This program provides a multi-dimensional fall prevention program for the elderly including: Safety and foot ware knowledge, Activity & efficacy; Food, home environment; Tablets & medication, and eYesight program. 2) Support and training program development for family members caring for elderly with dementia at home. 3) Home monitoring -based telenursing for COPD patient to enhance patient self-management for COPD and quality of life. Nurse researcher provides daily monitoring and triage to keep and maintain patient health & mental status and early detection of and interventions for exacerbations. **Concrete expected outcome:**

	1) Decrease elder's falls and fall related injuries. 2) Increase knowledge of dementia and develop skills of caring and approaches to help elderly with dementia with daily living activities, sharing and improve mood of family care givers. 3) Decrease exacerbations and hospitalizations, bed days of care, and health care cost. 4) Reports to WHO annually. **Links with WHO Activities:** SWHO Strategic Directions for Nursing and SDSNW KRAs 2,3,5; WHO WPR HRH Action Plan 2011-2015, KRAs 2,4; WHO WPR OSER 10.008.WP01 **Source of funding of the activity** St. Luke's -Terumo Collaborative Research Fund **Dissemination of the results:** Web site; Research report **Time frame of the activity:** 2012-2015
Activity 2 To contribute to WHOs work in furthering maximal utilization of health workers through nursing leadership in People-Centered Care and capacity-building and advancement of inter-disciplinary advanced nursing practice (ANP) education and service delivery.	**Title:** Development of team building capacity for graduate students in advanced nursing **Responsible person:** Prof. HISHINUMA, Michiko & Prof. KAMEI, Tomoko **Description:** Enhance advanced nurses capacity to work with collaboratively in a health team by developing and implementing a new five step course: 1) understanding system approach of health team; 2) taking "Challenge program seminar for developing interdisciplinary team"; 3) internship of team approach at model institutions; 4) practicing and demonstrating leadership in interprofessional teams; 5) evaluating own practice and presenting implications for future innovation of practice. **Concrete expected outcome:** 1) ANP graduate students and practitioners with capacities of leading interprofessional teams. 2) Evaluation reports and/or research abstracts/reports to be provided annually to WHO, to facilitate broader dissemination of lessons learned. **Links with WHO Activities:** WHO Strategic Directions for Nursing and SDSNW KRAs 2,3,5; WHO WPR HRH Action Plan 2011-2015, KRAs 2,4; WHO WPR OSER 10.009.WP01 **Source of funding of the activity:** Ministry of Education in Japan **Dissemination of the results:** Web site & Research paper **Time frame of the activity:** 2012-2015

Activity 3 To support the work of WHO in implementing research and system changes which improve the education and advanced practice of nurses and midwives in PHC.	**Title:** Organizing a Caring Community for People with Genetic Disorders. **Responsible person:** Associate Prof. ARIMORI, Naoko **Description:** In order to organize a caring community for the people with genetic disorder such as Down syndrome, this project will work with the patients, families, family associations, health professionals, and nursing students to identify health and support needs. A community participatory research approach will guide the project that includes periodic meetings and progress monitoring of community empowerment. **Concrete expected outcome:** 1) Stage one outcome: a) initiate and develop parents meeting for 'child with special needs' supported by the Parents' Association for children with genetic disorders; b) to identify the issues or problems and develop related policies for system changes to improve care. 2) Reports of the research initiation and progress to be submitted annually to WHO. **Links with WHO Activities:** WHO Strategic Directions for Nursing and SDSNW KRAs 2,3,5; WHO WPR HRH Action Plan 2011-2015, KRAs 2,4; WHO WPR OSER 10.009.WP01 **Source of funding of the activity:** St. Luke's-Terumo Collaborative Research Fund **Dissemination of the results:** Web site and Research paper **Time frame of the activity:** 2012-2015
Activity 4-1 To further progress towards MDG Maternal and Child Health targets through expanded regional and global partnerships.	**Title:** Collaborative development of master's program in midwifery at Muhinbili University **Responsible person:** Prof. HORIUCHI, Shigeko **Description:** To collaborate for the development of master's program in midwifery at Muhimbili University of Health and Allied Science, Tanzania, titled: Sustainable development of novice researchers able to contribute evidence based midwifery for the promotion of maternal child health in Tanzania **Concrete expected outcome:** Midwifery graduate program established within Buhinbili University. Report on progress, outcomes annually to WHO WPR, AFRO **Links with WHO Activities:** SWHO Strategic Directions for Nursing and SDSNW KRAs 2,3,5; WHO WPR HRH Action Plan 2011-2015, KRAs 2,4; WHO OWER 10.009.

	Source of funding of the activity: Ministry of Education in Japan **Dissemination of the results:** Web site and Research paper **Time frame of the activity:** 2012-2015
Activity4-2 To further progress towards MDG Maternal and Child Health targets through expanded regional and global partnerships.	**Title:** Collaborative development of master's program in community health nursing at Islamic University **Responsible person:** Prof. TASHIRO, Junko **Description:** To collaborate for the development of a master's program in community nursing at Islamic University, Indonesia to promote the health status of the community. **Concrete expected outcome:** Curricular development; faculty preparation; institutional approvals; programme initiation at Islamic University. Annual progress and outcome reports to WHO WPR, SEAR. **Links with WHO Activities:** SWHO Strategic Directions for Nursing and SDSNW KRAs 2,3,5; WHO WPR HRH Action Plan 2011-2015, KRAs 2,4; WHO OWER 10.009 **Source of funding of the activity:** Grant-in Aid for Scientific Research **Dissemination of the results:** Web site and Research paper **Time frame of the activity:** 2012-2015

るかなび運営会議

1．構成員

［委員長］　山田雅子

［委　員］　菱沼典子、有森直子、高橋恵子、佐藤晋臣（大学図書館）、高木裕也（研究支援室）、真部昌子（コーディネータ）、藤田淳子（コーディネータ）、佐藤直子（コーディネータ）

2．役割・職務

1）るかなびの活動計画を立案する。

2）るかなびの運営に必要な企画・手順等を検討し、問題があれば改善策を講ずる。

3）研究センターの機関事業として機能するよう、活動を推進する。

3．活動内容

1）11回の運営会議を開催し、運営に関する所持を検討、決定した。

2）活動資金獲得のために企業助成等を検討した。

4．課題

今年度はテルモ（株）より資金を得て活動を行った。今後の活動資金獲得については引き続き課題である。骨密度の測定１回500円については、骨密度計の保守点検費用相当を捻出することができた。また、有料化したことによって、利用者の抵抗感は危惧していたほど大きくはなかったことがわかった。認知症、がん、精神など、専門領域に特化した相談にも少しずつ応ずるようになっているため、専門的コンサルテーションとして有料化することも検討していけるのではないかという意見が出された。

るかなびの活動に市民ボランティアが加わり４年が経過しており、市民ボランティアが定着していることを感じる。市民がるかなびの活動に参加することを通して、自らの健康を考え、それぞれの地元での活動につなげている方もあり、地道な交流の重要性が見えてきている。

今後とも市民ボランティアとの協働の在り方を検討していきたい。

また教育機能として、認定看護師教育課程研修生が実習を行い、一般市民を対象としたコミュニケーション技術を学んだ。対象者中心の看護の提供の在り方を考える実習場として更なる充実を図りたい。

今後は引き続き市民中心の看護を提供していく実践の場として相談技術の向上を目指し、また、研究センターの基幹事業としての役割を明確化していきたい。

聖路加･テルモ共同研究事業

１．構成員

［責任者］　高橋恵子

［企画・広報・運営］　吉川英夫（テルモ株式会社）るかなび運営委員、看護実践開発研究センター教職員、るかなびボランティア

２．役割

テルモ株式会社からの寄付金をもとに、社会貢献事業として一般市民向けの健康支援セミナー「聖路加・テルモ新健康カレッジ」を開催し、自分自身の身体を理解し主体的に健康を管理調整してより良く生きることを目指して、市民に学びの場を提供している。

３．活動内容

１）聖路加市民アカデミー2011

開催日：2011年10月21日（金）13：00－16：30

「みんなでつくる、まちの医療～行動を起こした市民に聞く～」をメインテーマとし、多くの人々が不安に感じている将来の医療と介護の考え方について、今最も輝いている講師の先生方と共に、参加者と一緒に考えていく機会を提供した。

講演テーマと講師は、［特別講演］100歳を迎えて、今、考えること：日野原重明氏（聖路加国際病院理事長、聖路加看護学園理事長）、［講演Ⅰ］医療からケアへ～スウェーデンの高齢者ケアから見えてくること～：藤原瑠美氏（ホスピタリティ☆プラネット主宰）、［講演Ⅱ］市民と築くまちづくり～看護師、患者、市議会議員の経験から考えること～：馬庭恭子氏（広島市議会議員　地域看護専門看護師）であった。講演後には、横山裕子氏（正派音楽院研究科修了）による心癒される20弦箏曲演奏で、幕を閉じた。会場には346名　もの参加者が集まった。

２）新健康カレッジセミナー2011

開催日：［講座Ⅰ］2011年10月29日、［講座Ⅱ］2011年11月19日、［講座Ⅲ］2012年１月14日　いずれも土曜日14：00－15：30

「知って付き合う、自分のカラダ！」全３回シリーズで、［講座Ⅰ］なぜ糖尿病は怖いのか？：門伝昌己氏（聖路加国際病院）、［講座Ⅱ］なぜ高血圧が怖いのか？：西裕太郎氏（聖路加国際病院）、［講座Ⅲ］効果的な運動の鍵は？：青柳幸利氏（東京都健康長寿医療センター研究所）が開催された。参加者は、それぞれ、［講座１］52名、［講座２］48名、［講座３］50名であった。

４．課題

来年度も、本事業の特徴の１つである研究センター教職員と一般市民ボランティアとの協働運営を継続し、一般市民の関心に沿った講演、講座の企画を検討していく。

福島県災害支援プロジェクト

１．運営委員会構成員

井部俊子（委員長）および看護実践開発研究センター専任研究員（山田雅子教授、有森直子准教授、高橋恵子准教授、實崎美奈助教、八重ゆかり助教、田代真理助教、大畑美里助教、本田晶子助教）

２．役割・職務

NPO 法人日本臨床研究支援ユニット（代表：大橋靖雄東京大学教授）における「きぼうときずなプロジェクト」との協力関係のもと、東日本大震災と大津波により甚大な被害を受けた上に原子力発電所の事故に直面している福島県に対し、聖路加看護大学と縁の深い看護師・保健師を、現地のニーズに応じて派遣し、被災者の心と体の健康を取り戻すことを支援することを目的とした。活動期間は当面、2012年３月末までとした。

３．活動内容

１）組織

井部学長及び大橋教授のリーダーシップのもと、研究センター長、八重ゆかり助教と NPO 法人日本臨床研究支援ユニット石井苗子（2002 年卒業生）が主としてコーディネーターとしてかかわり、現地の

ニーズに基づいた福島県内での看護活動をコーディネートした。

2）保健師・看護師の募集

本学教員、大学院生、卒業生、本学認定看護師教育課程訪問看護コース修了者等に声をかけ、福島県内で活動可能な人材を募集した。その結果、2012年３月末までに延べ1,075名の看護師・保健師をいわき市、相馬市、郡山市に派遣することができた（表１，２）。

3）活動期間

2011年４月29日～2012年３月31日

4）活動内容

いわき市では市の保健師と協働し、市内避難所における看護活動、被災沿岸部の被災住宅訪問と健康調査、仮設住宅や借り上げアパート・集合住宅の戸別訪問による住民の健康チェックを行い、訪問戸数は約4000戸となった。

相馬市においては、萱間真美教授が中心になり、福島県立医大精神看護学教室が携わっている「心のケアチーム」のコーディネーター業務のサポートを行った（2011年５月７日から2011年８月30日）。また2011年11月７日～12日には、「心のケアチーム」の活動の一環として、延べ96名の看護師・保健師、看護学生を派遣し、仮設住宅計1,336戸の全戸訪問を実施した。さらに、2012年３月25日～30日には、相馬市保健センターとの協働関係を築き、「応急仮設住宅等における家庭（個別）訪問活動」として、健診を受けた方の世帯および社会福祉協議会による家庭訪問で要フォローとなった方の世帯を235件訪問した。

郡山市での活動は富岡町長と覚書を交わし、郡山市内に避難している富岡町民への支援を行った。実施に際しては、富岡町保健師の指示に従い、避難所（ビッグパレットふくしま）内での血圧測定・健康相談担当から始め、人々が仮設住宅へ移行した後は、滋賀県湖南市・新潟県柏崎市からそれぞれ派遣された保健師と協働しながら、仮設住宅の戸別訪問による健康チェック、集会所における「健康サロン」の運営などを行った。その後11月28日からは仮設住宅での戸別訪問に加え、借り上げ住宅への訪問も開始し、３月末までで約2,400戸を訪問した。

2012年４月以降も現地行政機関との協働体制に基づく福島県内被災地への支援を継続していく予定である。

5）活動資金の調達

基本的に活動に必要な、交通費、宿泊費、車両維持費等については、NPO法人日本臨床研究支援ユニットへの寄付によって賄った。大学としては、教職員、同窓会等へ寄付を呼びかけたことはもちろん、研究費の獲得にも努めた。

4．課題

活動を継続すること。

5．資料・データ

表１　参加登録者数（人）

分　類	人数
① 本学教員	32
② 本学大学院生	20
③ 本学学部生	12
④ 同窓生	41
⑤ 認定看護師教育課程修了生（訪問看護）	11
⑥ その他	56
合　計	172

表２　派遣者のべ人数

２－１　全体；表1の①～⑥すべてを含む　（人・日）

地域＼月	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	合計
いわき市	67	44	60	-[a]	52	43	40	30	24	26	26	410
郡山市	-[b]	10	36	48	38	49	42	31	28	44	34	362
相馬市	24	35	20	19	-[c]	-[c]	96[d]	0	0	0	109[e]	303
合計	91	89	116	67	90	92	178	61	52	70	169	1075

a いわき市の都合により活動一時休止
b ６月末より活動開始した
c ８月末で活動一旦終了
d 11/7～12　仮設住宅1,336戸の全戸訪問。派遣者には一部、学部生を含む
e 3/25～30　仮設住宅全戸訪問。派遣者には一部、学部生を含む

2－ 2　学内：本学教員および学生；表1の①～③　（人・日）

参加者	地域＼月	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	合計	%*
教員	いわき市	8	5	3	0	0	2	5	2	3	0	0	28	
	郡山市	0	3	3	9	1	13	8	10	6	0	4	57	
	相馬市	6	11	0	5	0	0	23	0	0	0	38	83	
院生	小計	14	19	6	14	1	15	36	12	9	0	42	168	16
	いわき市	4	6	9	0	2	3	1	5	6	3	3	42	
	郡山市	0	0	16	7	7	6	11	4	4	3	5	63	
	相馬市	13	17	6	9	0	0	17	0	0	0	7	69	
学部生	小計	17	23	31	16	9	9	29	9	10	6	15	174	16
	相馬市	0	0	0	0	0	0	48	0	0	0	35	83	8
合計		31	42	37	30	10	24	113	21	19	6	92	425	40

2－3　学外：同窓生/認定看護師教育課程修了生/その他；表１の④～⑥　（人・日）

地域＼月	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	合計	%*
いわき市	55	33	48	0	50	38	34	23	15	23	23	342	
郡山市	0	7	17	32	30	30	23	17	18	41	25	240	
相馬市	5	7	14	5	0	0	8	0	0	0	29	68	
合計	60	47	79	37	80	68	65	40	33	64	77	650	60

*派遣のべ人数全体（1,075人・日）に占める割合